

田 中 南 原 遺 跡
田 中 砂 古 遺 跡

2004.3

三木町教育委員会

跡 跡
遺 遺
原 古
砂 中
中 中
田 田

2004.3

三木町教育委員会

はじめに

郷土に残されている文化財は、その土地の歴史や文化を理解する上で欠くことのできない貴重な歴史的遺産であります。これらの文化財の適切な保存・活用を図り、文化的向上に資することがわれわれの責務と考えます。

このたび、県営圃場整備事業に伴って実施した、田中南原遺跡・田中砂古遺跡の発掘調査結果を本書に収録いたしました。前者では、弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての集落跡が確認され、また後者では、古墳時代中期、後期の集落跡が確認されました。

これらの発見は本町の歴史に新たな1ページを加えることになりました。本書が地域史解明の資料として、また今後の文化財保護・保存のための一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施、報告書作成に際し、関係諸機関および関係者各位から賜りました多大なご指導とご協力に対し、御礼申し上げます。

平成16年3月

三木町教育委員会

教育長 小川和夫

例　　言

1. 本書は以下に実施された埋蔵文化財発掘調査の報告を収録した。
 - (1) 県営圃場整備事業に伴い実施された、木田郡三木町大字田中に所在する「田中南原遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書
 - (2) 県営圃場整備事業に伴い実施された、木山郡一木町田中字砂古に所在する「山中砂古遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書
2. 発掘調査の期間は、以下のとおりである。

田中南原遺跡 平成6年12月26日～平成7年1月15日
田中砂古遺跡 平成9年1月13日～平成9年2月25日
3. 発掘調査は三木町教育委員会主事 石井健一が担当した。なお、田中南原遺跡の調査について
は香川県教育委員会文化行政課岡本健司氏、森下英治氏の指導を得た。
4. 本書の作成は、三木町教育委員会から㈱イビソクに委託され、同社の持田 透がこれを実施し
た。作成期間は平成15年7月1日から平成16年3月27日である。
5. 遺物の整理・実測は持田が行なった。またトレースは㈱イビソクにて実施した。
6. 遺物写真撮影は寿福写房に依頼した。
7. 本書の編集は、三木町教育委員会主事 高重和範の総括のもと、持田が行なった。
8. 本書における表記及び記述に関する凡例は以下の通りである。

SD……溝 SK……土坑 SP……柱穴 SH……堅穴住居 SB……掘立柱建物
9. 本書で用いる標高はすべて海拔（東京湾平均T. P）、方位は磁北を示す。
10. 本書第2図「周辺の遺跡位置図」の作成にあたり、国土地理院発行の1/25000地理図「志度」「鹿庭」「高松南部」を使用した。
11. 本書「遺物観察表」で、器高が括弧書きのものは残存高を示す。また色調については『新版
標準十色帖』を使用した。

本文目次

序文 例言

(田中南原遺跡)

第1章 調査に至る経緯	3
第2章 遺跡の立地と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	8
第1節 調査区	8
第2節 基本層序	8
第3節 造構と遺物	8
1. 竪穴住居	8
2. 売坑	13
3. 包含層出土遺物	13
第4章 まとめ	17

遺物観察表

写真図版

(田中砂古遺跡)

第1章 調査に至る経緯	35
第2章 立地と環境	36
第1節 地理的環境	36
第2節 歴史的環境	36
第3章 調査の成果	41
第1節 調査区	41
第2節 基本層序	41
第3節 造構と遺物	41
1. 竪穴住居	41
2. 挖立柱建物	44
3. 溝	45
第4節 立会調査の造構と遺物	45
1. 竪穴住居	45
2. 溝	45
3. 柱穴	47
4. 包含層遺物	47
第4章 まとめ	48

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

図 版 目 次

(田中南原遺跡)

- 第1図 三木町の位置
- 第2図 周辺の遺跡(S=1/25000)
- 第3図 調査区位置図(S=1/2500)
- 第4図 遺構配置図(S=1/200)
- 第5図 調査区西壁土層断面図(S=1/80)
- 第6図 SH-01遺構図(S=1/40)、出土遺物実測図(S=1/4)
- 第7図 SH-03・04・05遺構図(S=1/40)
- 第8図 SH-06遺構図(S=1/40)、出土遺物実測図1(S=1/4)
- 第9図 SH-06出土遺物実測図2(S=1/4)
- 第10図 SH-02・SK-01遺構図(S=1/40)
- 第11図 出土遺物実測図(S=1/4)

(田中砂古遺跡)

- 第12図 三木町の位置
- 第13図 周辺の遺跡(S=1/25000)
- 第14図 調査区位置図(S=1/2500)
- 第15図 調査区壁面土層断面図(S=1/80)
- 第16図 遺構配置図(S=1/200)
- 第17図 SH-01遺物検出状況(S=1/40)、出土遺物実測図(S=1/4)
- 第18図 SH-01遺構図(S=1/40)
- 第19図 SB-01遺構図(S=1/40)
- 第20図 立会調査区遺構配置図(S=1/200)
- 第21図 立会調査区遺構土層断面図(S=1/40)、出土遺物実測図(S=1/4)

写 真 図 版

(田中南原遺跡)

図版1 調査前状況 北から	調査区遠景 南から
図版2 南側調査区 近景	北側調査区 近景
図版3 SH-01 遺物検出状況	SH-01 完掘状況
図版4 SH-04 完掘状況	SH-05 完掘状況
図版5 SH-06 遺物検出状況	SH-06 完掘状況
図版6 SH-06 遺物出土状況	SH-06 遺物出土状況
図版7 SH-06 出土遺物	
図版8 SH-06 出土遺物	その他出土遺物

(田中砂古遺跡)

図版9 調査区前近景 南から	完掘状況 北から
図版10 SH-01 遺物検出状況	SH-01 完掘状況
図版11 SH-01 薙検出状況 1	SH-01 薙検出状況 2
図版12 SH-01 薙検出状況 3	SH-01 薙検出状況 4
図版13 SH-02 検出状況	SB-01 東から
図版14 調査区北 SD群完掘状況	SK-08 完掘状況
図版15 SH-03・SD-11 土層断面	SD-12 土層断面
図版16 SD-13 土層断面	SP-17 土層断面
図版17 SD-14 土層断面	SD-15 土層断面
図版18 SH-01 出土遺物	立会調査出土遺物

田 中 南 原 遺 跡

第1章 調査に至る経緯

香川県は、木田郡三木町東田中地区において平成6年度から農業基盤整備の計画を進めていた。事業主体である香川県中部土地改良事務所は「県営圃場整備事業東田中地区第2-1工区工事」に先立ち、事業計画地内の埋蔵文化財の包蔵状況を把握するため、香川県教育委員会文化行政課に試掘調査を依頼した。平成6年10月25日に実施された、県教育委員会による試掘調査では弥生時代後期前半の遺構、遺物を確認しており、同時期の集落が展開していると判断された。その後、調査結果をもとに関係部局と協議を行い、保護措置が必要とされた1,050m²のうちに排水路施工箇所の約101m²について事前調査をすることになり、残部については盛り土による現状保存で話がまとまった。

発掘調査は三木町教育委員会が調査主体となり、平成6年12月21日から翌年1月15日まで実施した。



第1図 三木町の位置

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

三木町は香川県木田郡の南部に所在する。行政区分では東西南北にそれぞれ、さぬき市、高松市、木田郡宇佐町、香川郡塙江町・徳島県美馬郡脇町と接する。地形的には北は標高2~300mの立石山地、南は標高5~900mの阿讚山脈に囲まれている。南の阿讚山脈に源を発する吉田川・新川は北流して、三木町中央部に沖積平野を形成する。そして西方の高松平野へと至る。

第2節 歴史的環境

田中南原遺跡の所在する三木町は、近年の発掘調査により多くの発見がなされている。

旧石器時代については、主とした遺跡は存在していない。しかしせつ塙古墳群からサヌカイト製糞状剥片が、池戸八幡神社古墳群の丘陵南端の切り通しから小型ナイフ形石器片が出土している。

縄文時代については南天枝遺跡の小流路と考えられる地点から縄文時代晩期の浅鉢が1点出土しているのみである。町周辺では高松市十川東・平田遺跡から縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土している。

弥生時代については、著名な遺跡遺物が知られていたが、近年の発掘調査で少しづつその詳細が判明するようになってきた。弥生時代前期では、多量の土器包含層が確認された農業部遺跡や福万遺跡などがあげられる。これらの遺跡では、前期中葉までは確認されていないが、後葉以降の土器が多く出土している。弥生時代中期では、鹿伏・中所遺跡で集落が確認されている。中期末になると西浦谷遺跡、白山3遺跡などの高地性集落に移っていく。後期は集落城が平野全体に広がり、西浦谷遺跡、池戸鶴洞遺跡、砂入遺跡、鹿伏・中所遺跡、田中南原遺跡などが数えられる。鹿伏・中所遺跡では、堅穴住居が70棟、撫立柱建物が20棟検出されており、他に比較して遺跡規模が大きい。当時期の中核的集落と考えられる。また、全体の規模は不明だが、田中南原遺跡も検出した住居跡数は多く、中核集落となりうる存在である。墳墓資料に関しては、弥生時代中期後半から古墳時代初頭の遺跡が多く、中期では、丘陵上に土塚墓や盛棺墓が営まれる白山3遺跡、大神山古墳群、西土居遺跡群などがあげられる。後期後半から終末期になると土器棺墓をもつ丸岡A・B墳墓群や石塚古墳群に加えて、山大寺池西丘上3号墳や西土居遺跡群で丘陵上に方形台状墓が形成されるようになる。また天満遺跡は、弥生時代終末期の墳丘墓であると考えられる。

古墳時代については、町内唯一の前方後円墳である池戸八幡神社1号墳が古墳時代前期初頭の所産と考えられている。全長約38m、後円部径約20mを測り、柄鏡状を呈する。古墳時代中期後半から三木町の古墳の造成が活発となる。権八原古墳群は5世紀後半に比定される古式群集墳である。組み合わせ箱式石棺を主体部とする、円墳などを9基検出している。6世紀前半には町南部の独立丘陵上に築造された壠切1号墳がある。堅穴式石室を主体部にもつ直径14.5mの円墳で、円筒埴輪の出土が知られている。また七ツ塙古墳群や西土居古墳群などの群集墳が存在する。6世紀後葉から町内の古墳に横穴式石室が採用されはじめ、7世紀から活発化する。町南部では、山大寺池西丘上2号墳、蛇ノ角古墳群、源訪カンカン山古墳群など丘陵ごとに数基から10数基が群集している。また、大型の横穴式石室をもつ龍現社古墳も町南部の丘陵に位置する。町北部では椿社古墳や風呂谷古墳など単独で築かれるという特徴がある。

古代については、律令体制にともなう条里が区画され、三木町中央には南海道の存在が推定され

ている。白鳳期以降に建立された始覚寺跡、香巡寺跡、上高岡廃寺跡、長楽寺跡などの古代寺院が存在し、近年試掘調査の行われた始覚寺跡では、寺域に北接して4基の瓦陶兼業窯が存在し、寺院に供給されていたと考えられる。また、寺域もほぼ1町四方であることも確認されている。7世紀頃の集落では、吉田川水系に所在し、南天枝遺跡と隣接する尾端遺跡があり、同水系上流に所在する長楽寺跡との関係も指摘されている。また北方丘陵には小谷窯跡が所在し、7世紀を中心に須恵器生産を行っていた。

中世については、三木町は管領細川頼之の四国支配の時代の後、守護代安富氏の統治となる。安富氏は東讃地域の守護代であったが、領域内に番西氏・寒川氏・植田氏などの諸勢力を抑えきれず、三木郡内にのみその影響力がおよんでいた。戦国時代になると、三木城を中心として勢力を誇っていた三木氏が途絶え、安富氏が代わって三木郡を支配するようになった。しかし長宗我部氏の讃岐侵攻時には、東讃においては十河城に拠点をおく十河氏のみが強大で、安富氏も十河氏とともに侵攻に対抗した。半木城を中心に戦火は激しかったという。他にも町内には串田城、池戸城などの城跡がのこる。

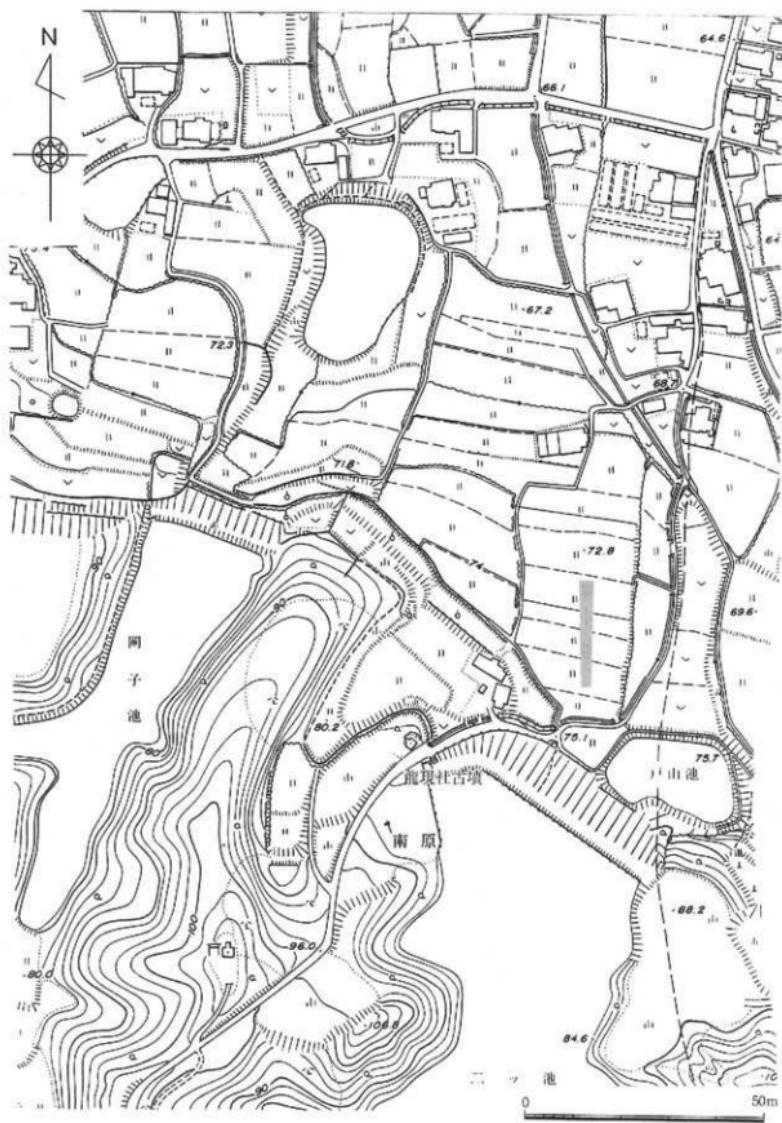
参考文献

- 三木町 1978 「三木町史」
松川重治・二神希代江 2003 『西土居遺跡群』 三木町教育委員会
西村尋文編 2003 『寺田・庄宮遺跡 南天枝遺跡』 (財)香川県埋蔵文化財調査センター
松本敏二編 1975 『権八原古墳群発掘調査概報』 国立医科大学候補予定地内埋蔵文化財発掘調査團



- | | | | |
|-----------------|------------|-------------|------------------|
| 1 田中南原遺跡 | 9 天神山古墳群 | 17 蛇ノ角古墳群 | 25 石塚古墳群 |
| 2 田中砂古遺跡 | 10 白山1遺跡 | 18 尾崎遺跡 | 26 勝負谷古墳 |
| 3 山大寺池西丘上・2・3号墳 | 11 白山2遺跡 | 19 山大寺跡 | 27 高松市十三東・平田遺跡 |
| 4 南天枝遺跡 | 12 白山3遺跡 | 20 山大寺池北丘古墳 | 28 龍現社古墳 |
| 5 砂入遺跡 | 13 中津城跡 | 21 丸岡A古墳群 | 29 雷塚古墳 |
| 6 農学部遺跡 | 14 旧長樂寺跡 | 22 丸岡B古墳群 | 30 四十塚古墳 |
| 7 福万遺跡 | 15 鹿伏・中所遺跡 | 23 石塚A古墳群 | 31 三つ子池古墳 |
| 8 串田城跡 | 16 堀切古墳群 | 24 石塚B古墳群 | 32 高松市公測池1・2・3号窓 |

第2図 周辺の遺跡 (S = 1 / 25000)



第3図 調査区位置図 ($S = 1/2500$)

第3章 調査の成果

第1節 調査区（第3図）

田中南原遺跡は、三木町の中央に広がる高松平野の南端、木田郡三木町大字田中字南原に位置する。調査対象地は、二つの池の北約75mの水田部に所在し、東西幅約3.4m、南北長さ約50mを測り、調査面積は10m²である。

第2節 基本層序（第5図）

遺跡が立地する低位段丘は、調査時の段階では起伏もなく平坦であったが、旧地形は調査区の南側から北側にかけてゆるやかに傾斜している。後世の削平のため、調査区南では包含層を確認できず、0.2mの表土を剥いだところ（TP74.3m）で地山土を確認している。調査区北側にかけて暗灰色砂質土の包含層の堆積を確認した。包含層の厚みは北側で最大0.2mを測り、検出面はTP73.8mである。調査区南端と北端の比高差は0.5mとなる。

第3節 遺構と遺物

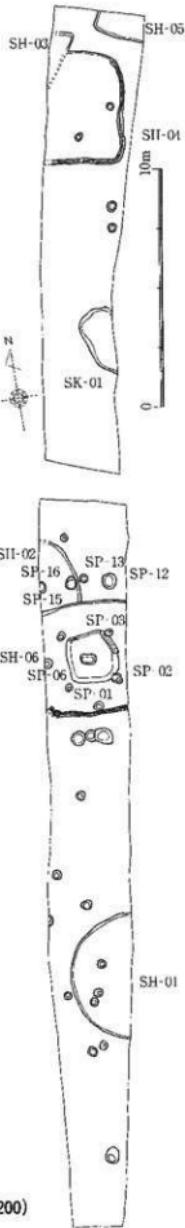
今回の調査では弥生時代中期後半、古墳時代前期、古墳時代後期の竪穴住居、土坑、ピットを検出した。このうち弥生時代中期後半の竪穴住居1棟、古墳時代前期の竪穴住居1棟に関しては出土遺物が一定量確認されたが、残りの遺構からは遺物の出土は少なかった。

1. 竪穴住居

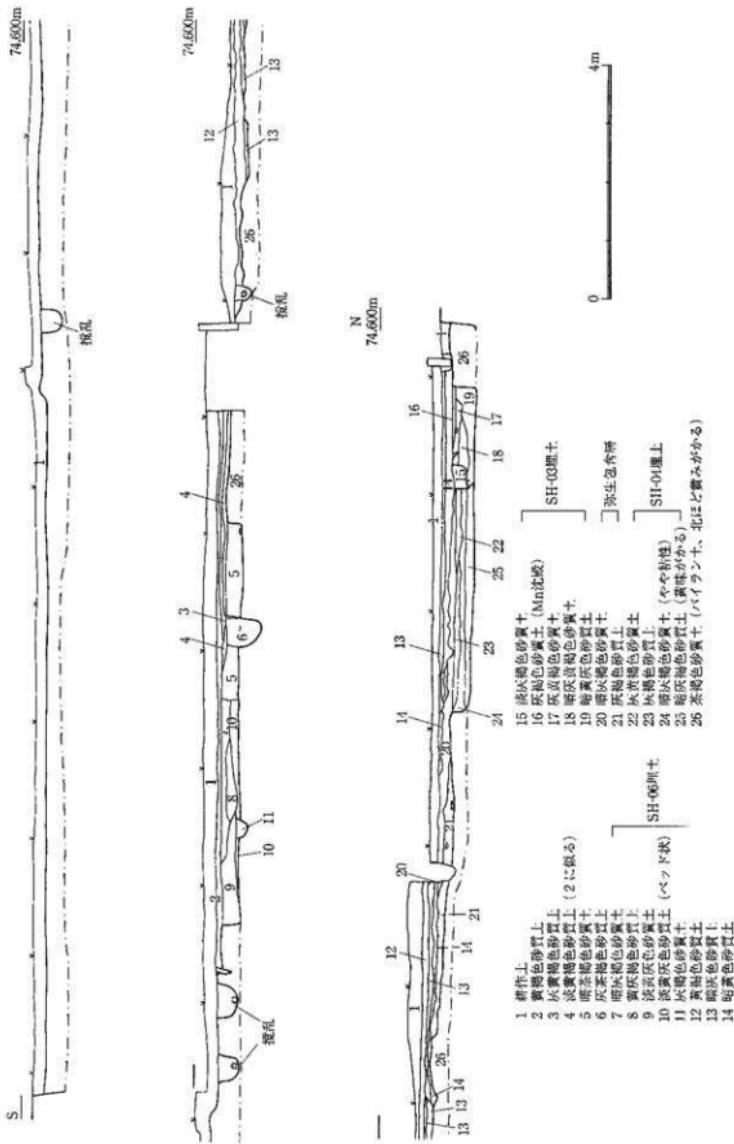
SH-01（第6図、図版3）

調査区の南端で検出した、平面プランは円形の住居址である。住居址の東半分は調査区外にあり、その西半分のみ検出した。南北径5.6m、深さ0.2mを測る。上部は削平されているため、住居址南端は掘り方がわずかに残るのみである。床面積は検出した範囲で30.7m²を測り、推定60m²となる。上柱穴は2基のみ確認している。おそらく方形に配置する4本柱穴となるであろう。柱穴はそれぞれ、径0.3m、深さ0.3mを測る。

埋土は2層確認できた。また、埋土中からは多量の炭化木材が出土しており、焼失家屋である可能性が非常に高い。炭化木材は、住居址のほぼ全面に渡って出土しており、残りが良く、大きいものが含まれている。樹種は広葉樹系である。また、床面では焼土を有一定の範囲で確認したが、明瞭な炉跡は検出できなかった。



第4図 遺構配置図 (S = 1/200)



第5図 調査区西壁土層断面図 ($S = 1/80$)

出土遺物（第6図、図版8下）

遺物は少量の弥生土器が出土した。

1は口縁部の破片である。外方に直線的に開き、端部が肥厚し、面取りする。2は高坏の脚部である。脚端部に凹線を施している。3は底部片である。出土した遺物より弥生時代中期後半の堅穴住居である。

SH-02（第10図、図版2）

南側調査区の北端で西側に広がるように住居の約1/4を検出した。平面形状は円形で、SH-06に切られる。検出できた部分が少なかったので全容は不明であるが、床面積は20m²を確認した。推定床面積は80m²と考えられる。深さは0.1mを測り、非常に浅い。主柱穴は検出できず、壁面に接するように1基の土坑を検出した。

出土遺物は少なく、実測可能な遺物はなかったが、出土した遺物より、弥生時代後期後半の堅穴住居と考えられる。

SH-03（第7図、図版4）

北側調査区の北端で西側に広がる一部を検出し、SII-04とは切り合い関係にある。検出した平面形状から方形の堅穴住居と推定される。深さは0.4mを測る。

出土遺物（第11図、図版4）

遺物は、須恵器が少量出土している。古墳時代後期の堅穴住居である。

6は須恵器壊身である。丸みを帯びて立ち上がり、返しが短く内傾して立ち上がる。比較的身の深い壊身である。TK-217併行と考えられる。

SH-04（第7図、図版4）

北側調査区の北端で、西側に広がるように住居の約2/3を検出した。平面形状は隅丸方形を呈し、1辺4.8m、深さ0.1mを測る。北西部でSH-03に切られる。住居址の北側を除いて、周囲に壁溝が確認できた。柱穴を2基検出したが、主柱穴となりうるビットは検出できなかった。

出土遺物（第11図、図版8）

遺物は、弥生土器、土師器が少量出土している。

1は壺の口縁部である。口縁端部には凹線文が施されている。2は高坏の口縁部である。3は鉢形土器であろう。口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部が内面に肥厚する。4は壺の口縁部である。口縁が直線的に立ち上がる。5は丸底鉢である。器壁が薄く、口縁端部外面を丁寧になでている。

出土遺物の時期幅が大きいが、古墳時代前期に埋没した堅穴住居であると考えられる。

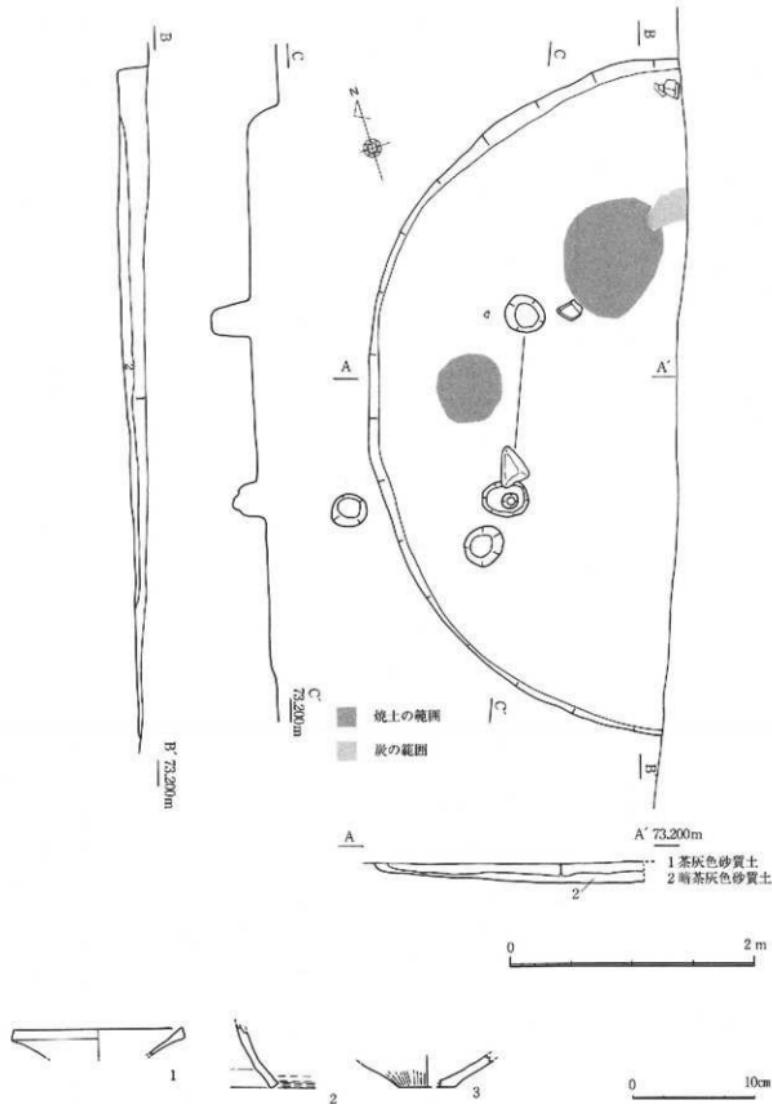
SH-05（第7図、図版4）

北側調査区の調査区北端で北東方向に広がるように住居の約1/5を検出した。平面形状は方形を呈し、1辺2.2mまでを検出した。深さは0.3mを測る。柱穴となりうる遺構は検出できなかった。

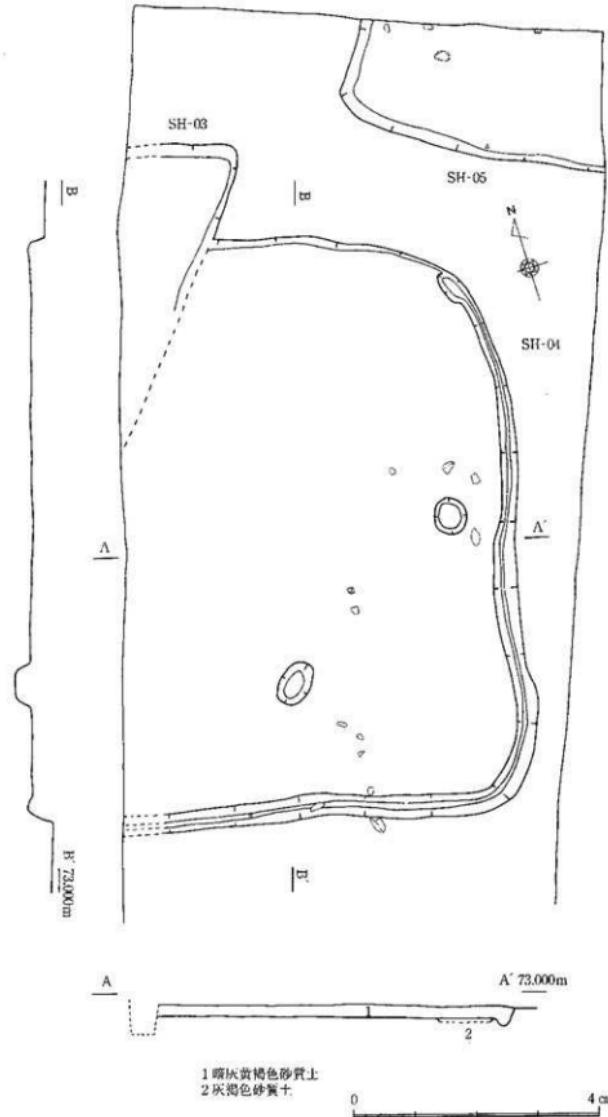
出土遺物（第11図、図版8）

遺物は少量の弥生土器と石器が出土した。出土した土器は小片で図示できなかったが、弥生時代中期の堅穴住居と考えられる。

12は凹基式の石器である。先端と基部両端とも欠損している。サスカイト製で、表面の風化が著しい。



第6図 SH-01遺構図 ($S=1/40$)、出土遺物実測図 ($S=1/4$)



第7図 SH-03・04・05構造図 ($S = 1/40$)

SH-06 (第8図、図版5、6)

南側調査区北寄りで検出した。西壁と東壁が検出できなかったがほぼ全体を検出した。平面形状は隅丸方形を呈し、1辺4.7mを測る。床面積は37.8m²を検出しており、推定48m³となる。上柱穴は4本を検出し、柱穴間は2.0mを測る。また、SP-06はこの住居址に伴うものか不明であるが、建て替えの柱穴の可能性もある。住居址の南端と北端の一部で壁溝を検出した。壁溝は幅0.16m、深さ0.22mを測る。住居址中央には浅い土坑を検出した。さらにその中央に炭層を確認しており、炉址と考えられる。また、住居址の中央土坑の南側は約0.1m程周囲よりも1段高く、ベッド状遺構と考えられる。

出土遺物 (第8図、第9図)

遺物は床面直上で多く出土している。出土遺物は壺形土器、鉢形土器、丸底壺形土器、石皿、擦石などである。古墳時代初頭の堅穴住居と考えられる。

1・2は壺の胸部である。1は内面を粗い板などでによって調整している。3は小型の鉢である。外縁を削ることによって整えている。4・6・22・27は丸底鉢である。4は口縁部が内湾して立ち上がり、ほぼ半球状を呈する。6は口縁部が外方に開き気味に弯曲して立ち上がる。22は口縁部が屈曲して外方に強く開く。27は口縁部が緩やかに内湾して立ち上がる。外縁を削りによって整えている。5は弥生土器の底部である。7・8・26は小型丸底壺である。7・26は口縁部が長く立ち上がり、8は短く立ち上がる。また、8は外縁を削りによって整えている。9から16は口縁部である。9・10は屈曲した口縁部が大きく開くもので、端部には凹線が施されるものがある。11・12は「く」の字に屈曲した口縁である。13～16・18は有段の口縁部で、口縁部外縁に文様は施されない。17・19は壺の頸部片である。頸部の立ち上がり付近の外縁に長い刻みが連続して施される。20は須恵器坏身の底部である。流れ込みの遺物と考えられる。21・23～25は底部である。21は上げ底、23・25は安定した平底、24はやや不安定な平底である。28・29はすり石である。28は丸みをおびた川原石を利用しておらず、上下端部をすり石として、側面をたたき石として使用している。29は同じく3面を利用しているが、すべてすり石として利用している。30は石皿である。座りの良い面を底に利用している。使用面は研磨され、くぼんでいる。

2. 土坑

SK-01 (第10図、図版2)

北側調査区の南寄りで、調査区の東側に延びるような形で、土坑の2／3を検出した。平面形状は長楕円形を呈し、長軸2.8m、深さ0.2mを測る。

出土遺物 (第11図)

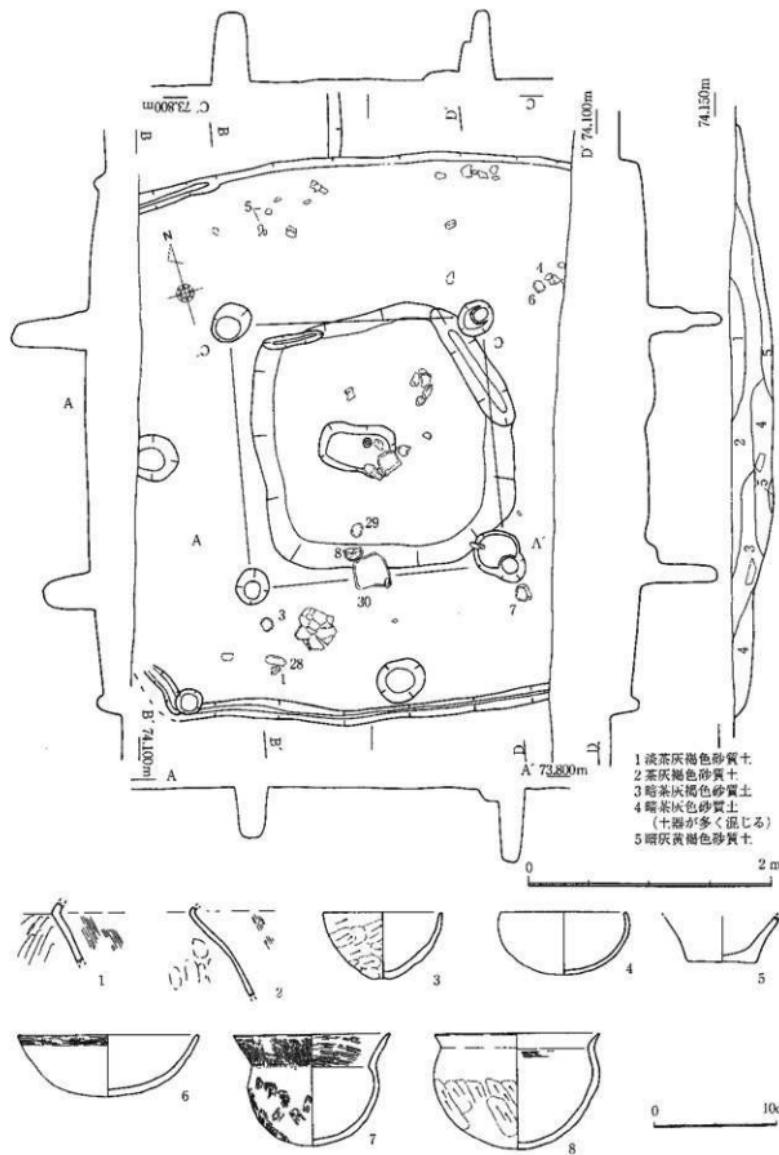
埴生土坑から小片の遺物が数点出土した。

9は、壺の口縁部である。緩やかに外反して立ち上がり、端部を面とりする。10は鉢形土器である。底部外縁にはタタキ痕が明瞭に残る。出土した遺物から、弥生時代後期後半の土坑と考えられる。

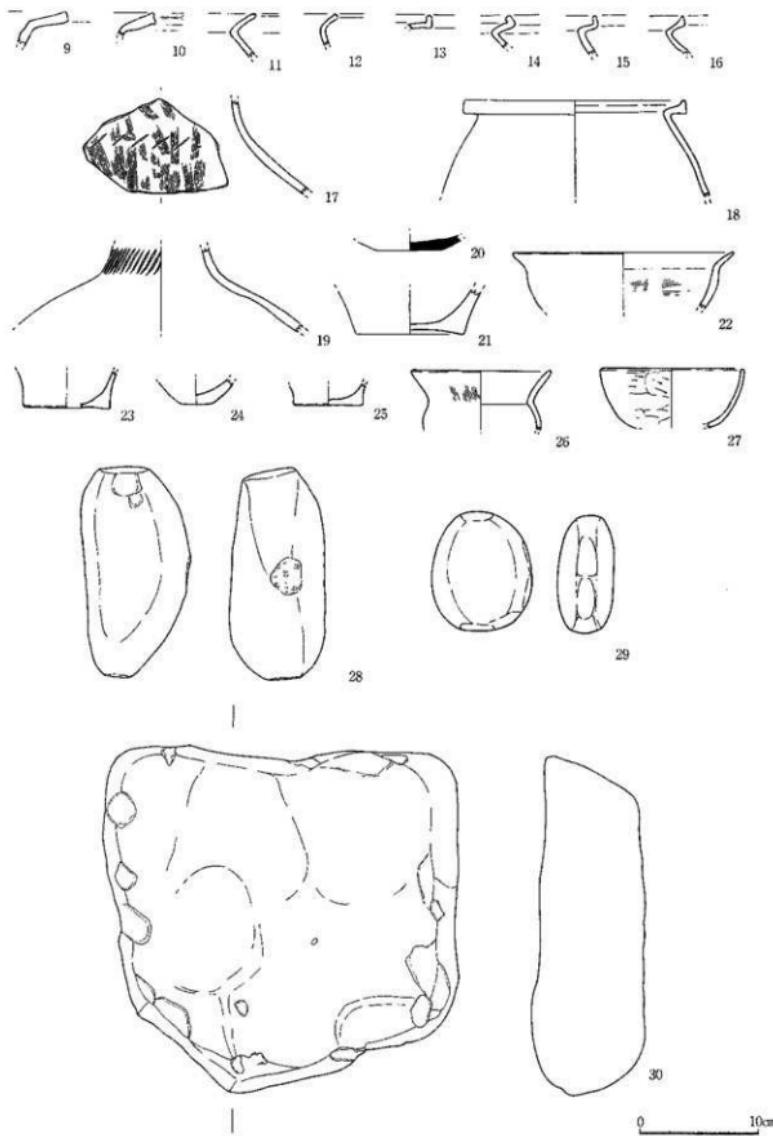
3. 包含層出土遺物 (第11図)

当遺跡では後世の削平が著しく、包含層がわずかしか残っていなかった。よって、包含層から出土した遺物はほとんど無い。

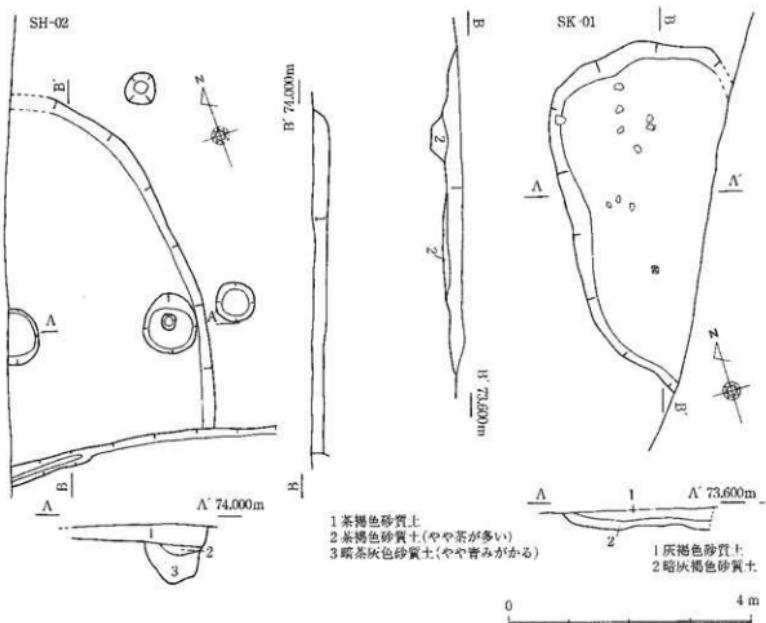
11は壺の底部である。安定した平底で、大きく開いて立ち上がる。



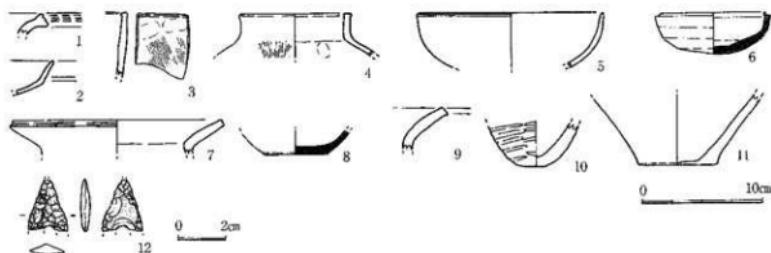
第8図 SH-06遺構図 (S=1/40)、出土遺物実測図1 (S=1/4)



第9図 SH-06出土遺物実測図2 (S=1/4)



第10図 SH-02・SK-01遺構図 (S=1/40)



第11図 出土遺物実測図 (S=1/4)

第4章 まとめ

田中南原遺跡では、竪穴住居6棟、土坑1基を検出した。そのなかでも住居址の全容がつかめたものが3棟検出できた。

竪穴住居(SII-01)は焼失家屋である。埋土中から多量の炭化木材が出土している。また、この住居址のみ円形の平面プランである。遺物量は少ないが、弥生時代後期の所産であると考えられる。竪穴住居(SH-06)は壁溝をもつ方形プランで主柱穴4本の竪穴住居である。出土遺物は遺跡内では一番多く、残存度の高いものが多い。出土遺物は弥生時代中期から6世紀代の須恵器まで出土しているが、床面で比較的まとまって出土している小型丸底壺が当遺構の所産であると考えられ、古墳時代前期と考えられる。竪穴住居(SH-07)も壁溝を持つ住居跡である。しかし明確なピットを検出できなかった。その他の住居址も全体が判明するものではなく、遺物も少量のみであった。

今回の調査では、弥生時代中期後半、古墳時代前期、後期の居住域であることが判明した。当遺跡東を流れる吉田川水系の丘陵部は、町内はもとより県内でも有数の古墳密集地域である。当遺跡の東方の丘陵先端部に所在する丸岡A・B墳墓群からは弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての土塙墓や壺棺墓が、石塚古墳群では横穴式石室を持つ後期古墳が確認されている。また、当遺跡の北方の掘切1号墳は主体部に竪穴式石室をもつと推定され、南方の龍現社古墳では町内最大級の横穴式石室をもっている。当遺跡を取り巻くこれらの古墳は、この集落との深い関係をもつものと理解でき、長期にわたって定住した拠点集落の一つとしての可能性が高い。

遺 物 觀 察 表

土器觀察表

國名 番号	遺物 番号	同様 参考	取上 番号	遺物名	分類	器皿	現存部位	口径 法量(cm)	器高 底径	成形および調整法 (外面/内面)		胎 土	焼成	備 考
										明褐色(7.5YR 5 / 8) 明褐色(7.5YR 5 / 8)	1~2mmの砂粒少 量、芯付多(含む) 2mmの砂粒少量含 t ₁			
6 1 8 SH-01 張生土器 瓢	SH-01	張生土器	瓢	口縁部	13.6 (2.3)	—	摩滅／摩滅			明褐色(7.5YR 5 / 8) 明褐色(7.5YR 5 / 8)	1~2mmの砂粒少 量、芯付多(含む) 2mmの砂粒少量含 t ₁	良好	外面上門線文 1条	
6 2 8 SH-01	SH-01	張生土器	瓢	口縁部	—	(5.3)	—	摩滅／摩滅		明褐色(7.5YR 5 / 4) 明褐色(7.5YR 5 / 4)	1~2mmの砂粒少量含 t ₁	良好	外面上門線文 1条	
6 3 8 SH-01	SH-01	張生土器	瓢	底部	4.6 (2.6)	—	ハケ／ナギ			灰青褐色(10YR 5 / 2) 灰青褐色(10YR 5 / 2)	1~2mmの砂粒少 量含む	良好		
8 1 8 10 SH-06	SH-06	張生土器	瓢	脇部	—	(7.2)	—	ハケ／指押さえ		灰褐色(7.5YR 6 / 4) 灰褐色(7.5YR 6 / 4)	1~2mmの砂粒少 量含む	良好		
8 2 8 2 SH-06	SH-06	張生土器	瓢	脇部	—	(5.0)	—	ハケ／板ナギ		灰褐色(10YR 7 / 3) 灰褐色(10YR 3 / 1)	1~2mmの砂粒少 量含む	良好		
8 3 7 3 SH-06	SH-06	張生土器	鉢	完形	10.0 4.5	1.4	ハケ／ナギ			灰褐色(7.5YR 6 / 2) 灰褐色(7.5YR 6 / 2)	1~2mmの砂粒少 量含む	良好	外面上に擦付着	
8 4 7 SH-06	SH-06	張生土器	鉢	完形	10.4 5.2	9底	ナギ／ナギ			浅灰褐色(7.5YR 8 / 4) 浅灰褐色(7.5YR 7 / 4)	1~2mmの砂粒多 (含t ₁)	良好	器表皿平滑	
8 5 8 17 SH-06	SH-06	張生土器	瓢	底部	—	(3.9) 5.6	ナギ／ナギ			灰褐色(10YR 7 / 4) 灰褐色(10YR 8 / 1)	1~3mmの砂粒多 含む	良好		
8 6 7 SH-06	SH-06	張生土器	鉢	完形	15.0 5.1	丸底	ナギ／ナギ			灰褐色(7.5YR 7 / 6) 灰褐色(7.5YR 7 / 6)	1~2mmの砂粒多 (含t ₁)	良好	器表皿凹凸あり	
8 7 7 6 SH-06	SH-06	張生土器	小型丸底兼 小型丸底兼	完形	13.0 9.3	丸底	深めハケ／ 深めハケ／ナギ			灰褐色(7.5YR 7 / 3) 灰褐色(7.5YR 7 / 3)	1mmの砂粒若干含 t ₁	良好		
8 8 7 7 SH-06	SH-06	張生土器	甕	口縁部	13.7 9.6	丸底	横ナギ／ナギ			滑褐色(7.5YR 6 / 6) 滑褐色(7.5YR 6 / 6)	1mmの砂粒若干含 t ₁	良好		
9 9 8 SH-06 ₁₂	SH-06 ₁₂	張生土器	甕	口縁部	—	(2.0)	—	ナギ／ナギ		滑褐色(7.5YR 7 / 6) 滑褐色(7.5YR 7 / 6)	1~3mmの砂粒含 t ₁	良好		
9 10 8 SH-06	SH-06	張生土器	甕	口縁部	—	(2.0)	—	ナギ／ナギ		灰白色(10YR 7 / 1) 灰白色(10YR 7 / 1)	1~3mmの砂粒含 t ₁	良好		
9 11 8 SH-06	SH-06	張生土器	甕	L口縁部	—	(3.6)	—	摩滅／摩滅		滑褐色(7.5YR 7 / 6) 滑褐色(7.5YR 7 / 6)	1mmの砂粒少量含 t ₁	良好		
9 12 8 SH-06 ₁₂	SH-06 ₁₂	張生土器	甕	口縁部	—	(2.6)	—	ナギ／ナギ		滑褐色(7.5YR 7 / 6) 滑褐色(7.5YR 7 / 6)	1~3mmの砂粒少 量含む	良好		
9 13 8 SP-06	SP-06	張生土器	甕	口縁部	—	(2.1)	—	摩滅／摩滅		滑褐色(7.5YR 7 / 6) 滑褐色(7.5YR 7 / 6)	1~2mmの砂粒若 干含む	良好		

固形 番号	固形 番号	取上 番号	遺標名	分類	器皿	現存部位	口径	器高	底径	法品(cm)		成形技術(彫刻技術法 (外側/内面))		色調 (外側/内面)	胎土	焼成	備考
										横	縦	横	縦				
9	14	8	SH-06 SP-06	弥生土器	甕	口縁部	—	(2.7)	—	横滅/横滅	—	丸底色(10YR 4/1) 圓底色(10YR 4/1)	1~2 mmの砂粒少 量含む	良好			
9	15	8	SP-06	弥生土器	甕	口縁部	—	(3.3)	—	横滅/横滅	—	褐色(7.5YR 7/6) 褐色(10YR 4/1)	1 mmの砂粒若干	良好			
9	16	8	SP-06	弥生土器	甕	口縁部	—	(3.2)	—	横滅/横滅	—	明黄褐色(10YR 7/6) 棕色(5YR 7/6)	1~2 mmの砂粒少 量含む	良好			
9	17	8	SH-06 SP-06	弥生土器	甕	口縁部	—	(8.0)	—	ハケ/ナデ	—	明黄褐色(10YR 7/6) 明黃褐色(10YR 7/6)	1~2 mmの砂粒少 量含む	良好			
9	18	8	SH-06 SP-06	弥生土器	甕	口縁部～ 肩部	18.4	(2.0)	—	ナデ/ナデ	—	灰白色(10YR 7/1) 灰白色(10YR 7/1)	1~3 mmの砂粒少 量含む	良好			
9	19	8	SH-06	弥生土器	甕	肩部	—	(7.1)	—	摩滅/指捺記	—	明黄褐色(10YR 7/6) 明黃褐色(10YR 7/6)	1~2 mmの砂粒少 量含む	良好			
9	20	8	SH-06	須恵器	壺	底部	—	(2.0)	5.6	回転ナデ/回転ナデ	—	灰白色(N7灰)灰色(N7)	断	堅敏			
9	21	8	SH-06	弥生土器	甕	底部	—	(3.8)	9.0	ナデ/ナデ	—	褐色(7.5YR 6/6) にやい褐色(7.5YR 6/4)	1~2 mmの砂粒少 量含む。色い 出物有り。色い	良好	上げ底		
9	22	8	SH-06	弥生土器	甕	口縁部	18.4	(3.9)	—	摩滅/ナデ・ハケ	—	にやい褐色(7.5YR 7/4) にやい褐色(7.5YR 7/4)	1~3 mmの砂粒少 量、玄母片多含む	良好			
9	23	8	SH-06 SP-06	弥生土器	甕	底部	—	(3.1)	7.2	ナデ/ナデ	—	褐色(7.5YR 6/6) 褐色灰(7.5YR 4/1)	1~2 mmの砂粒少 量含む	良好	やや上げ底		
9	24	8	SH-06	弥生土器	甕	底部	—	(2.2)	2.6	ナデ/ナデ	—	褐色(7.5YR 7/6) 明黄褐色(7.5YR 7/1)	1~2 mmの砂粒多	良好			
9	25	8	SH-06 SI-06	弥生土器	甕	底部	—	(2.2)	2.6	ナデ/ナデ	—	褐色(7.5YR 7/6) 明黄褐色(7.5YR 7/1)	1~2 mmの砂粒多	良好			
9	26	8	SH-06 SI-06	弥生土器	甕	底部	12.0	(5.0)	—	ケズリ・指オサエ/ ナデ	—	にやい褐色(7.5YR 7/4) にやい褐色(7.5YR 7/4)	1 mmの砂粒少 量含む	良好			
9	27	8	SI-06	弥生土器	甕	完形	12.0	(5.0)	—	ハケ/摩滅	—	明黄褐色(10YR 7/6) にやい褐色(10YR 7/4)	1~3 mmの砂粒少 量含む	良好			
11	1	8	SI-04	弥生土器	甕	口縁部	—	(1.8)	—	摩滅/摩滅	—	褐色(7.5YR 7/6) 褐色灰(7.5YR 7/6)	1 mmの砂粒若干	良好	口端外側面部 に凹線 2 条		
11	2	8	SH-04	土尊器	瓶	口縁部	—	(2.8)	—	ナデ/ナデ	—	淡黄褐色(7.5YR 8/4) 淡黄褐色(7.5YR 8/4)	1~2 mmの砂粒若干	良好			
11	3	8	SH-04	土尊器	不明	口縁部	—	(5.3)	—	ハケ/ナデ	—	明黄褐色(10YR 7/6) にやい褐色(10YR 7/2)	1 mmの砂粒若干	良好			

図面番号	遺物名	取上番号	遺構名	分類	置置	現存部位	口径	器高	底径	法量(cm)	成形および調整方法 (外側/内側)	色 (外側/内側)	胎	十	焼成	備考
11 4 8	SH-04 弥生土器	SH-04	鉢	鉢	口縁部	9.4	(3.5)	—	ナデハナデ/ナデ	明褐色(7.SYR 5/8) 暗褐色(7.SYR 5/8)	1~2 mmの妙乾少 量、素的片多く含む	良好				
11 5 8	SH-04 土輪器	SH-04	鉢	鉢	口縁部	15.6	(4.6)	—	摩滅/摩擦	褐色(7.SYR 6/6) 褐色(7.SYR 6/6)	1~2 mmの妙乾少 量含む。精良。	良好				
11 6 8	SH-03 繁惑器	SH-03	縫惑器	縫身	縫合部	8.6	3.5	—	回転ナデ/回転ナデ	灰白色(2.SYR 7/1) 灰白色(2.SYR 7/1)	素	良好				
11 7 8	SH-04 弥生土器	SH-04	鉢	鉢	口縁部	17.4	(2.9)	—	摩滅/摩擦	灰白色(10YR 8/2)	1 mmの妙乾少 量含む。若干含む	良好				
11 8 1	内側	SH-01	縫惑器	縫身	底部	—	(2.0)	5.6	回転ナデ/回転ナデ	灰白色(N 7)	1~2 mmの妙乾少 量含む。若干含む。良 好					
11 9 8 3	SK-01 弥生土器	SK-01	鉢	鉢	口縁部	—	(3.5)	—	ナデ/ナデ	褐色(7.SYR 6/6) 褐色(7.SYR 6/6)	1~2 mmの妙乾少 量含む。やや重い。	良好				
11 10 8	SK-01 弥生土器	SK-01	鉢	鉢	底部	—	(3.7)	1.5	叩き/ナデ	褐色(7.SYR 6/6) 褐色(7.SYR 5/1)	1~3 mmの妙乾少 量含む。	良好				
11 11 8	内側	SH-01	縫惑器	縫身	底部	—	(6.0)	6.6	ナデ/ナデ	[2.5]赤褐色(5YR 5/4) [2.5]黄色(10YR 6/4)	1~2 mmの妙乾少 量、素母片多く含む。	良好				
12 8	内側	SH-04 弥生土器	鉢	鉢	口縁部	—	(3.7)	1.5	叩き/ナデ	褐色(7.SYR 6/6) 灰白色(7.SYR 5/1)	1~3 mmの妙乾少 量含む。	良好				
13 8	SH-04 繁惑器	SH-04	縫惑器	縫身	底部	—	(3.7)	—	回転ナデ/回転ナデ	灰白色(N 7) 灰白色(N 7)	素	良好				
14 8	SH-04 繁惑器	SH-04	縫惑器	縫身	底部	—	(3.7)	—	回転ナデ/回転ナデ	灰白色(N 7) 灰白色(N 7)	素	良好				

石器觀察表

図面番号	遺物番号	取上番号	遺構名	分類	額	長さ	厚み	幅	法量(cm)	備考		
										内側	外側	側面
9 28 7 21	SH-06	ナド石	—	—	18.0	9.0	8.8	—	側面3.0が平出。1面が凹出部のみ。1面が 丸く削り底と叩き痕。1面が叩き痕のみ。			
9 29 8 19	SH-06	ナド石	—	—	10.0	4.7	8.5	—	側面3.0が平出。すべて削り底がある。			
9 30 7 20	SH-06	石皿	—	—	30.0	8.8	28.2	—				
11 8	SH-05	石獣	—	—	2.2	0.3	1.7	—	サメカ介製			

写 真 図 版

図版 1



調査前状況 北から



調査区遠景 南から

図版 2



南側調査区 近景

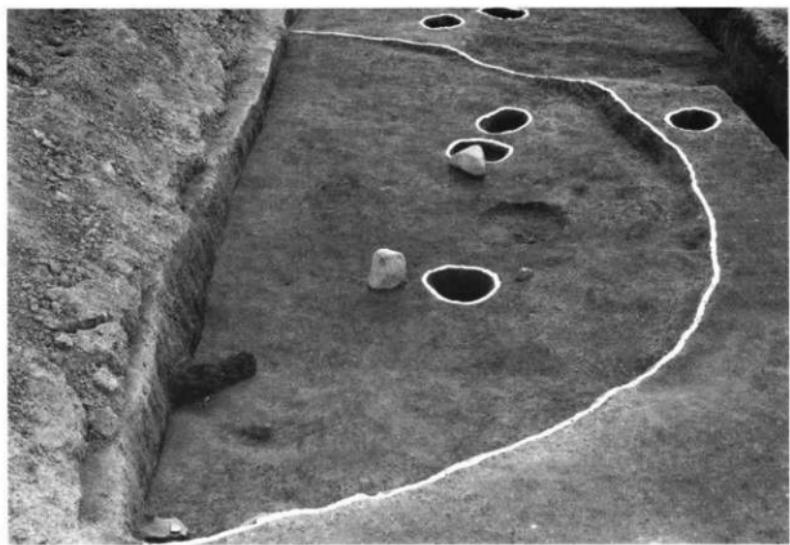


北側調査区 近景

図版 3

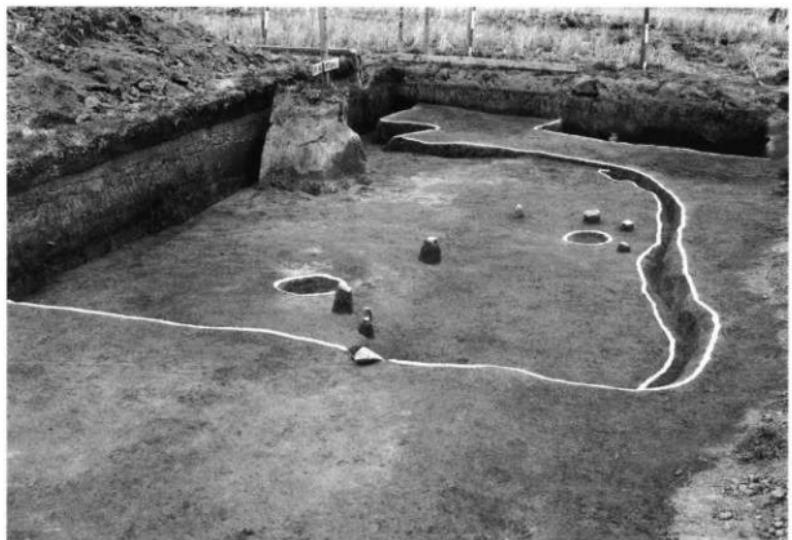


SH-01 遺物検出状況

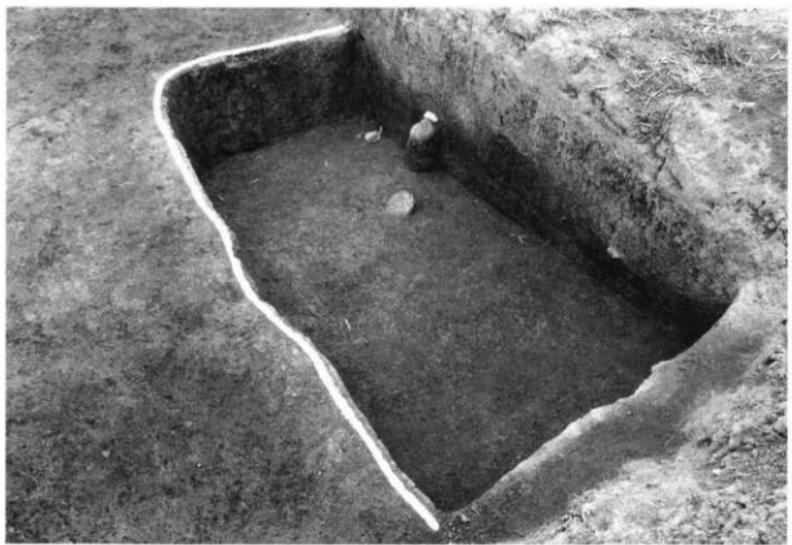


SH-01 完 挖 状 況

図版 4

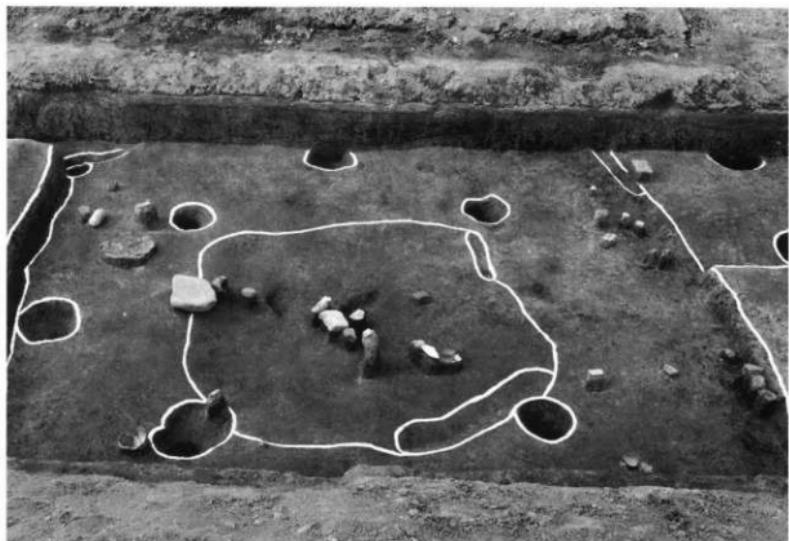


SH-04 完 堀 状 況

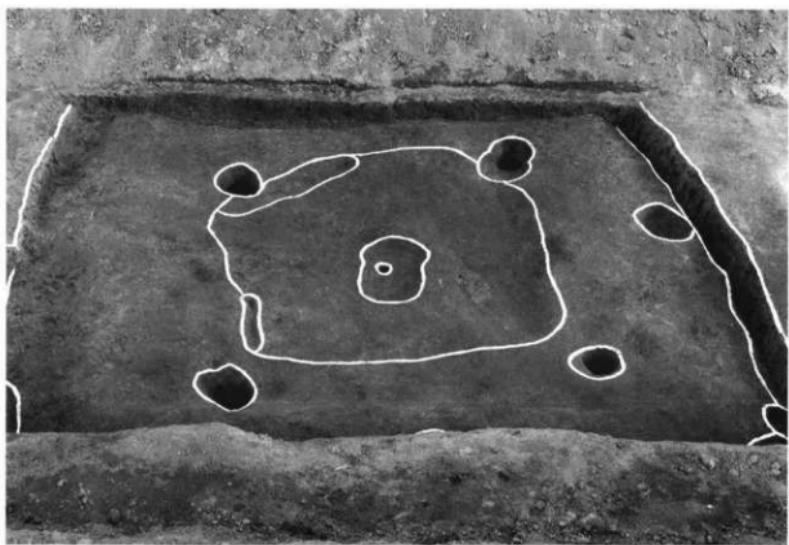


SH-05 完 堀 状 況

図版 5



SH-06 遺物検出状況



SH-06 完 売 状 況

図版 6

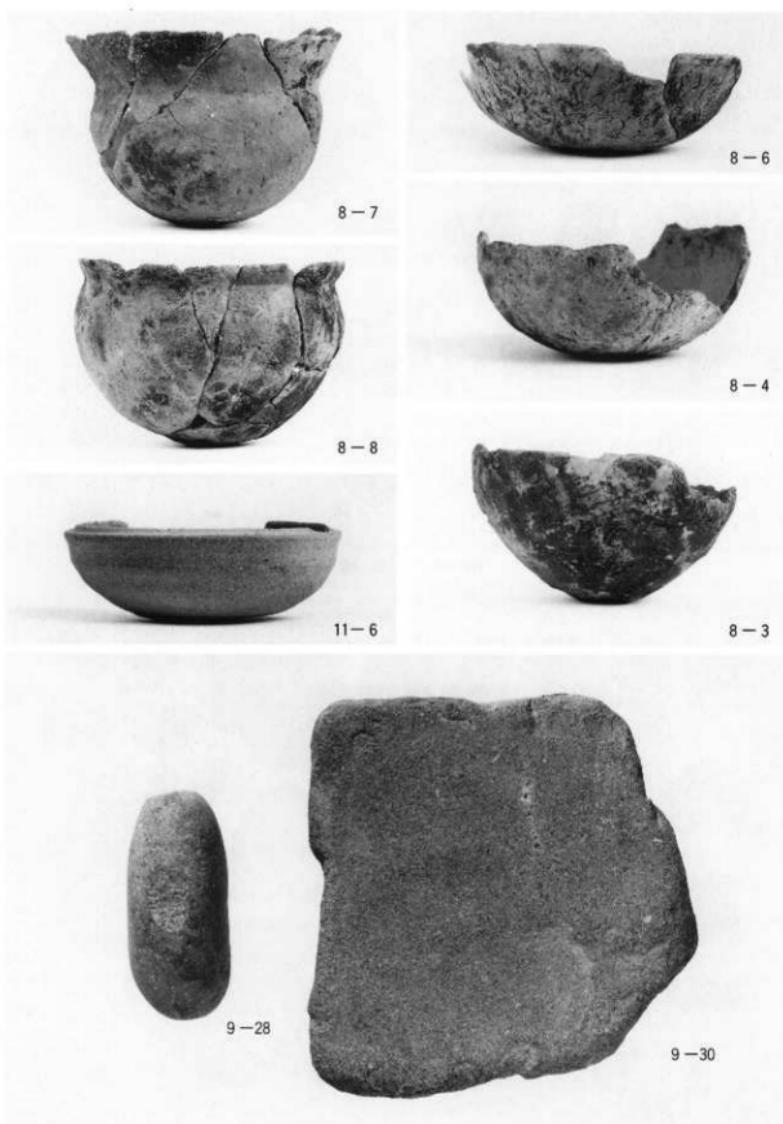


SH-06 遺物出土状況



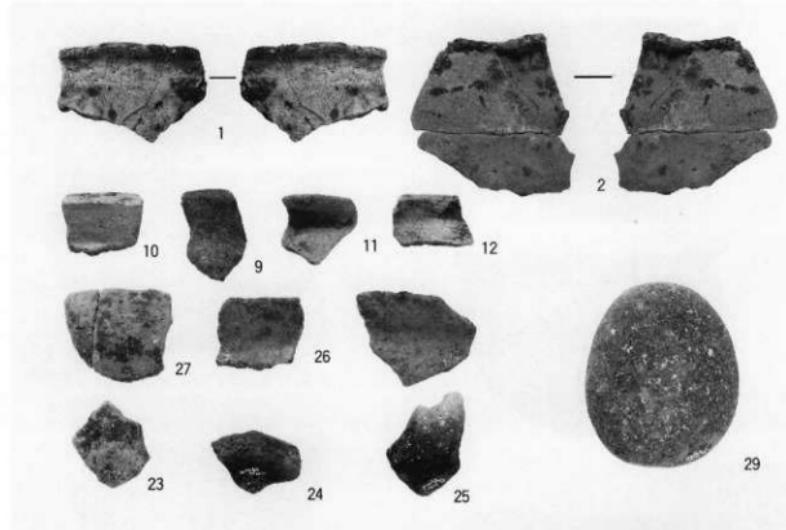
SH-06 遺物出土状況

図版 7

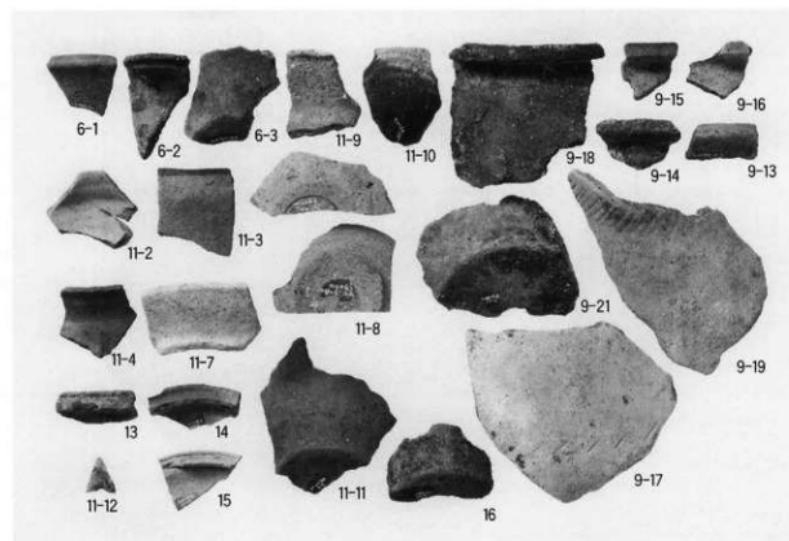


SH-06 出土遺物

図版 8



SH-06 出土遺物



その他出土遺物

田 中 砂 古 遺 跡

第1章 調査に至る経緯

香川県は、木田郡三木町田中地区において平成6年度から農業基盤整備の計画を進めていた。事業主体である香川県中部土地改良事務所は「県営圃場整備事業田中地区第3工区工事」に先立ち、事業計画地内の埋蔵文化財の包蔵状況を把握するため、香川県教育委員会文化行政課に試掘調査を依頼した。平成8年3月4日から3月6日に実施された、県教育委員会による試掘調査では弥生時代後期前半の遺構、遺物を確認しており、同時期の集落が展開していると判断された。その後、調査結果をもとに関係部局と協議を行い、保護措置が必要とされた194m²について発掘調査を行った。

発掘調査は三木町教育委員会が調査主体となり、平成9年1月13日から同年2月25日まで実施した。



第12図 三木町の位置

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

三木町は香川県木山郡の南部に所在する。行政区画では東西南北にそれぞれ、さぬき市、高松市、木山郡牟礼町、香川郡塩江町・徳島県美馬郡脇町と接する。地形的には北は標高2~300mの立石山地、南は標高5~900mの阿讚山脈に囲まれている。南の阿讚山脈に源を発する吉田川・新川は北流して、三木町中央部に沖積平野を形成する。そして西方の高松平野へと至る。

第2節 歴史的環境

山中砂古遺跡の所在する三木町は、近年の発掘調査により多くの発見がなされている。

旧石器時代については、主とした遺跡は存在していない。しかしちつ塚古墳群からサヌカイト製翼状剥片が、池戸八幡神社古墳群の丘陵南端の切り通しから小型ナイフ形石器片が出土している。

縄文時代については南犬伏遺跡の小路跡と考えられる地点から縄文時代晚期の浅鉢が1点出土しているのみである。町周辺では高松市十川東・平田遺跡から縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土している。

弥生時代については、著名な遺跡遺物が知られていたが、近年の発掘調査で少しづつその詳細が判明するようになってきた。弥生時代前期では、多量の土器包含層が確認された農学部遺跡や福万遺跡などがあげられる。これらの遺跡では、前期中葉までは確認されていないが、後葉以降の土器が多く出土している。弥生時代中期では、鹿伏・中所遺跡で集落が確認されている。中期末になると西浦谷遺跡、白山3遺跡などの高地性集落に移っていく。後期は集落城が平野全体に広がり、西浦谷遺跡、池戸鍋窪遺跡、砂人遺跡、鹿伏・中所遺跡、田中南原遺跡などが数えられる。鹿伏・中所遺跡では、堅穴住居が70棟、掘立柱建物が20棟検出されており、他に比較して遺跡規模が大きい。当時期の中核的集落と考えられる。また、全体の規模は不明だが、田中南原遺跡も検出した住居跡数が多く、中核集落となりうる存在である。墳墓資料に関しては、弥生時代中期後半から古墳時代初頭の遺跡が多く、中期では、丘陵上に土塙墓や壇棺墓が営まれる白山3遺跡、大神山古墳群、西土居遺跡群などがあげられる。後期後半から終末期になると上器棺墓をもつ丸岡A・B墳墓群や石塚古墳群に加えて、山大寺池西丘上3号墳や西土居遺跡群で丘陵上に方形台状墓が形成されるようになる。また天満遺跡は、弥生時代終末期の墳丘墓であると考えられる。

古墳時代については、町内唯一の前方後円墳である池戸八幡神社1号墳が古墳時代前期初頭の所産と考えられている。全長約38m、後円部径約20mを測り、柄鏡状を呈する。古墳時代中期後半から三木町の古墳の造成が活発となる。権八原古墳群は5世紀後半に比定される古式群集墳である。組み合わせ箱式石室を主体部とする、円墳などを9基検出している。6世紀前半には町南部の独立丘陵上に築造された堀切1号墳がある。竪穴式石室を主体部にもつ直徑14.5mの円墳で、円筒埴輪の出土が知られている。また七ツ塚古墳群や西土居古墳群などの群集墳が存在する。6世紀後葉から町内の古墳に横穴式石室が採用されはじめ、7世紀から活発化する。町南部では、山大寺池西丘上2号墳、蛇ノ角古墳群、諏訪カンカン山古墳群など丘陵ごとに数基から10数基が群集している。また、大型の横穴式石室をもつ龍現社古墳も町南部の丘陵に位置する。町北部では椿社古墳や風呂谷古墳など単独で築かれるという特徴がある。

古代については、伴令体制にともなう条里が区画され、三木町中央には南海道の存在が推定され

ている。白鳳期以降に建立された始覚寺跡、香蓮寺跡、上高岡廃寺跡、長楽寺跡などの古代寺院が存在し、近年試掘調査の行われた始覚寺跡では、寺域に北接して4基の瓦陶兼業窯が存在し、寺院に供給されていたと考えられる。また、寺域もほぼ1町四方であることと確認されている。7世紀頃の集落では、吉田川水系に所在し、南天枝遺跡と隣接する尾端遺跡があり、同水系上流に所在する長楽寺跡との関係も指摘されている。また北方丘陵には小谷窯跡が所在し、7世紀を中心に須恵器生産を行っていた。

中世については、三木町は管領細川頼之の四国支配の時代の後、守護代安富氏の統治となる。安富氏は東讃地域の守護代であったが、領域内に香西氏・寒川氏・横田氏などの諸勢力を抑えきれず、三木郡内にのみその影響力がおよんでいた。戦国時代になると、三木城を中心として勢力を誇っていた三木氏が途絶え、安富氏が代わって三木郡を支配するようになった。しかし長宗我部氏の讃岐侵攻時には、東讃においては十河城に拠点をおく十河氏のみが強大で、安富氏も十河氏とともに侵攻に対抗した。平木城を中心に戦火は激しかったという。他にも町内には巾田城、池戸城などの城跡がのこる。

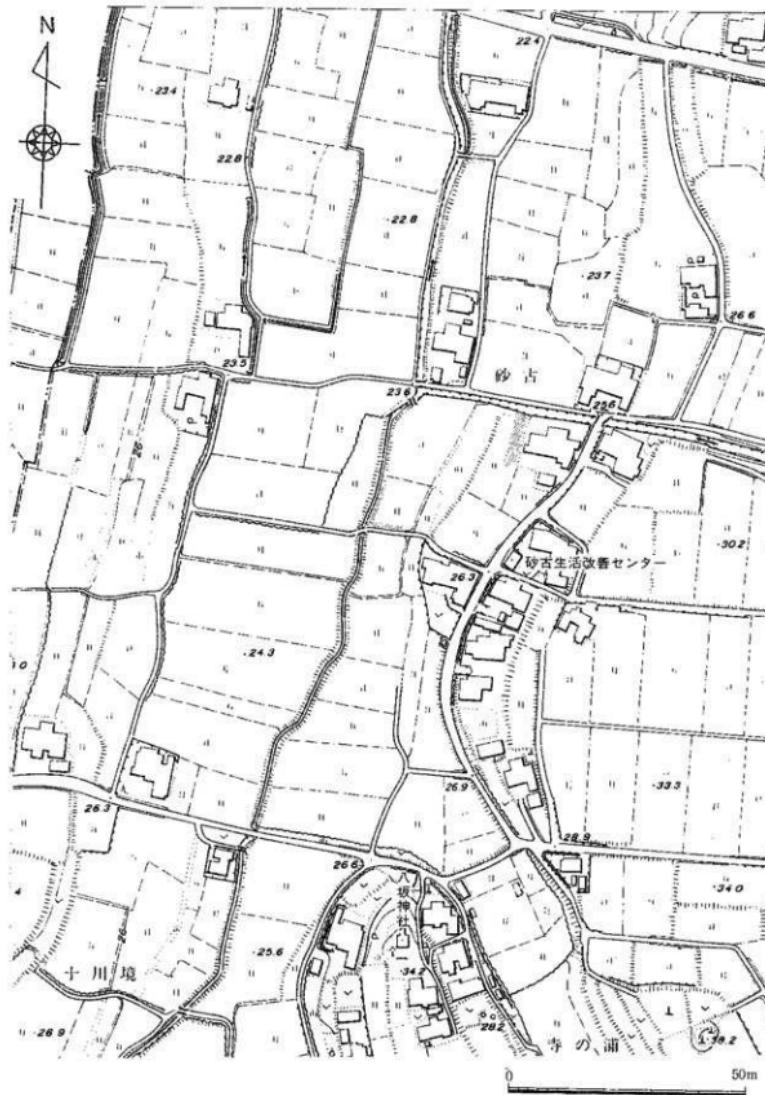
参考文献

- 三木町 1978 『三木町史』
松田重治・二神希代江 2003 『四十居遺跡群』 三木町教育委員会
西村尋文編 2003 『寺田・產宮遺跡 南天枝遺跡』 (財)香川県埋蔵文化財調査センター
松本敏三編 1975 『播磨八原古墳群発掘調査概報』 国立医科大学候補予定地内埋蔵文化財発掘調査会

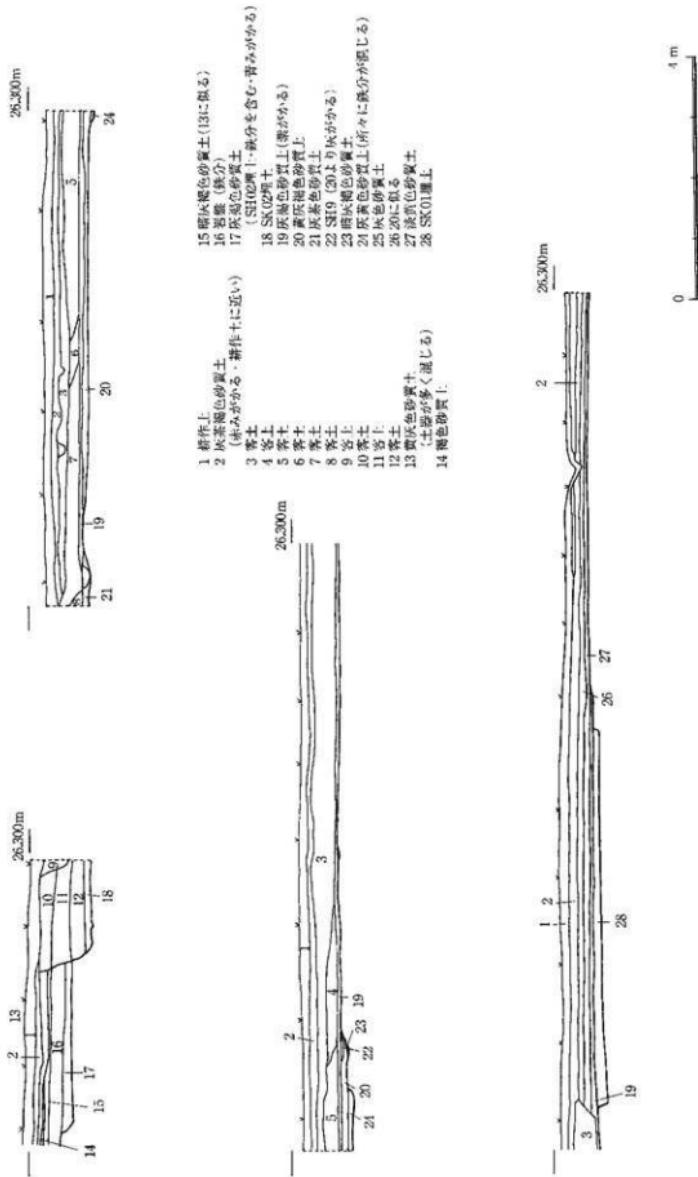


- | | | | |
|------------------|------------|-------------|------------------|
| 1 田中砂古跡跡 | 9 天神山古墳群 | 17 龜ノ角古墳群 | 25 石冢古墳群 |
| 2 田中南原遺跡 | 10 白山1遺跡 | 18 尾端遺跡 | 26 勝負谷古墳 |
| 3 山大寺池西丘上1・2・3号墳 | 11 白山2遺跡 | 19 山大寺跡 | 27 高松市十三東・平田遺跡 |
| 4 南天枝遺跡 | 12 白山3遺跡 | 20 山大寺池北丘古墳 | 28 鹿現社古墳 |
| 5 砂人遺跡 | 13 中坪城跡 | 21 丸岡A墳墓群 | 29 雷塚古墳 |
| 6 義學部遺跡 | 14 旧長榮寺跡 | 22 丸岡B墳墓群 | 30 四十塚古墳 |
| 7 福万遺跡 | 15 鹿伏・中所遺跡 | 23 石冢A古墳群 | 31 三つ子池古墳 |
| 8 串田城跡 | 16 横切古墳群 | 24 石冢B古墳群 | 32 高松市公同池1・2・3号室 |

第13図 周辺の遺跡 ($S = 1/25000$)



第14図 調査区位置図 ($S = 1/2500$)



第3章 調査の成果

第1節 調査区（第14図）

田中砂古遺跡は蓮池の西400mに所在し、蓮池に向かって緩やかに傾斜する微高地上に立地する。調査区は東西幅約7.5m、南北長さ約27.5mを測り、調査面積は194m²である。

第2節 基本層序（第15図）

調査対象地は後世の削平をうけ、調査区南側では耕作土直下で地山となる。調査区北側にかけても削平が激しく、さらに客土が厚く堆積している。包含層は薄く残るのみであった。TP25.5mで造構の検出を行なった。

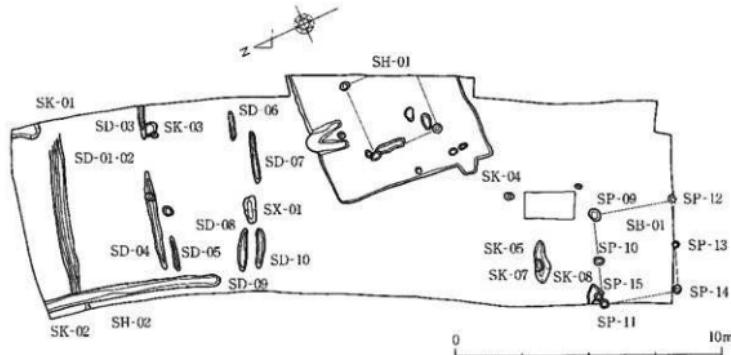
第3節 遺構と遺物

今回の調査では堅穴住居2棟、掘立柱建物1棟、溝10条、土坑7基、ピットなどを検出した。

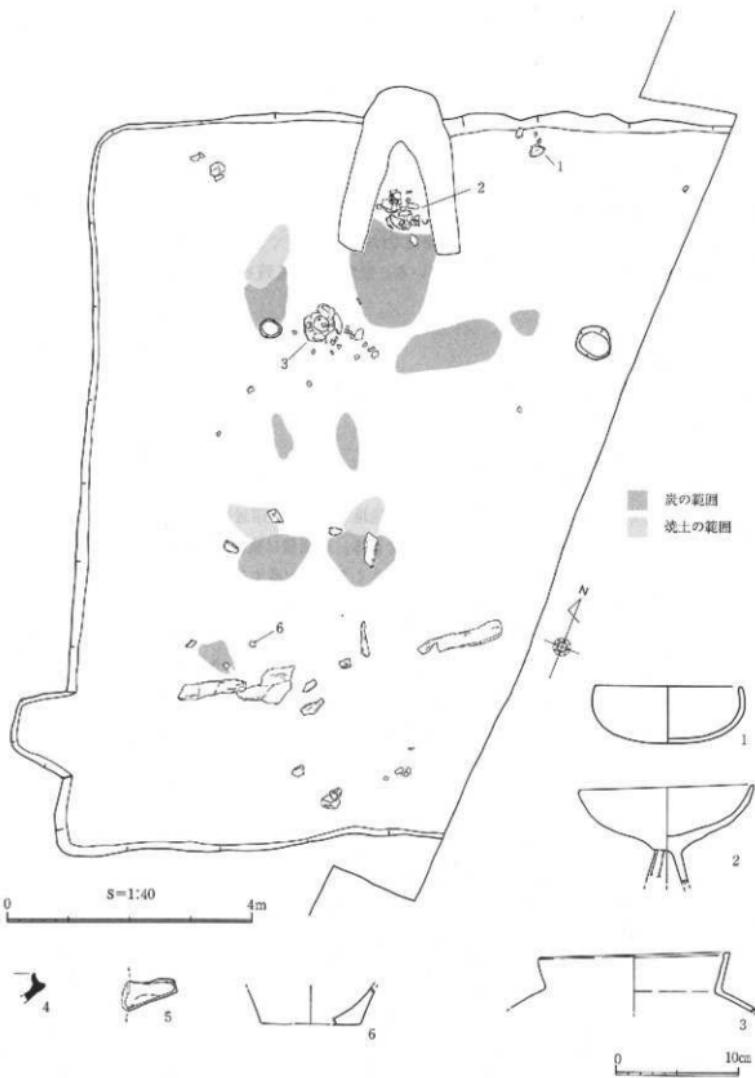
1. 堅穴住居

SH-01（第16、17図、図版10、11、12）

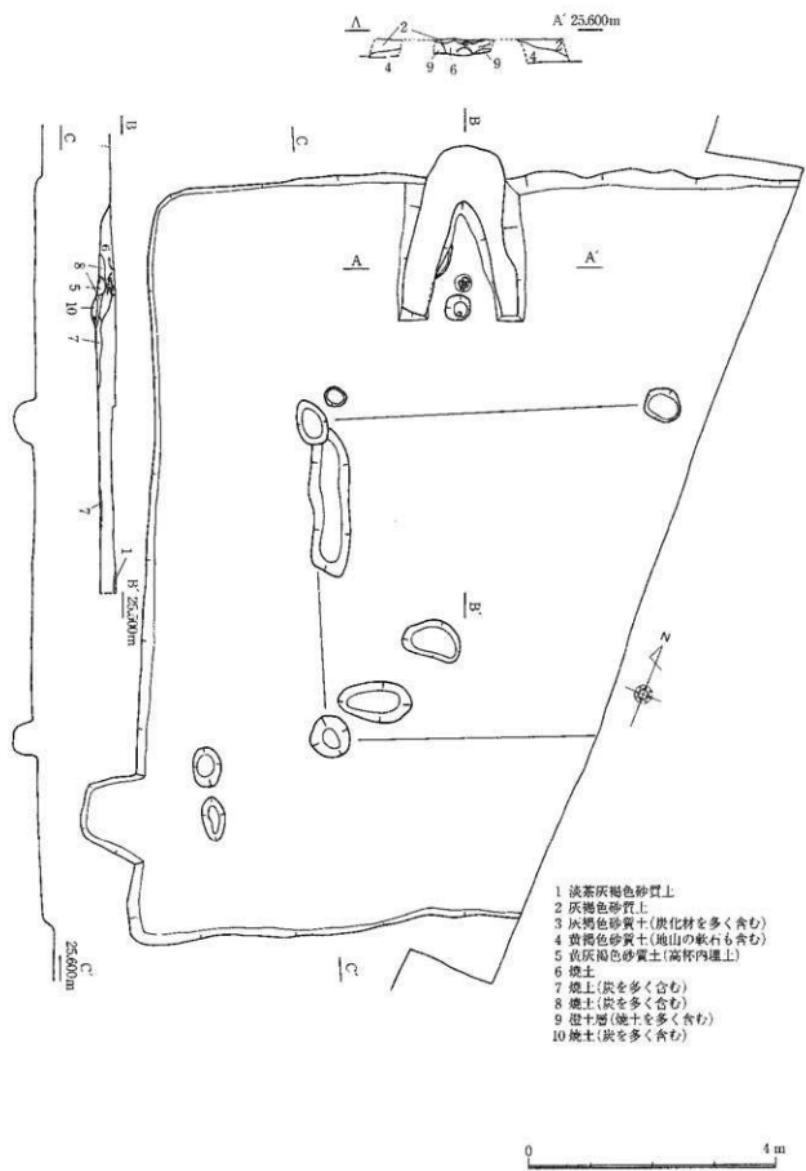
調査区の中央で検出した、平面プラン方形の住居址である。住居址は調査区外東側に延びる形で、住居の3/4を検出した。1辺6m、深さ0.2mを測る。床面積は検出した範囲で22.0m²を測り、推定36m²となる。主柱穴は3基確認している。おそらく方形に配置する4本柱穴となるであろう。柱穴はそれぞれ、長径0.3mの略円形を呈し、深さ0.2~0.3mを測る。住居址北辺には造り付けの竈を有する。幅1.0m、長さ1.4mの範囲でU字状に硬くしまっている。竈の中心部からは、高坏が逆さまの状態ではほぼ完形の状態で出土している。住居廃絶時に掘えたものであると考えられる。また、造構埋土中からは多量の炭化木材が出土しており、焼失家屋である可能性が非常に高い。炭化木材は、住居址の中心から1mほど離れた場所から多く出土しており、大きさも大きいものが含まれている。炭化木材は広葉樹系の木材である。



第16図 造構配図 (S = 1/200)



第17図 SH-01遺物検出状況 (S=1/40)、出土遺物実測図 (S=1/4)



第18図 SH-01造構図 ($S=1/40$)

出土遺物（第17図、図版18）

遺物は壇上中から出土したものは小片が多く、流れ込みであると考えられる。実測図を掲載する土器は床面で出土したもので、この構造の廃絶にともなうものと考えられる。高坏の年代観から古墳時代中期前半であると考えられる。

1は丸底鉢形土器である。湾曲して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。2は高坏である。坏部は緩やかにたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。脚部は面取りするように外面を調整している。3は壺である。口縁部は上方に立ち上がり端部内面はわずかに肥厚し、内傾する平坦面をもつ。全体的に薄いつくりである。4は坏身の破片である。返しが上方に短く立ち上がっている。5は壺の把手である。6は弥生土器の底部である。4～6は流れ込みの可能性が高い。

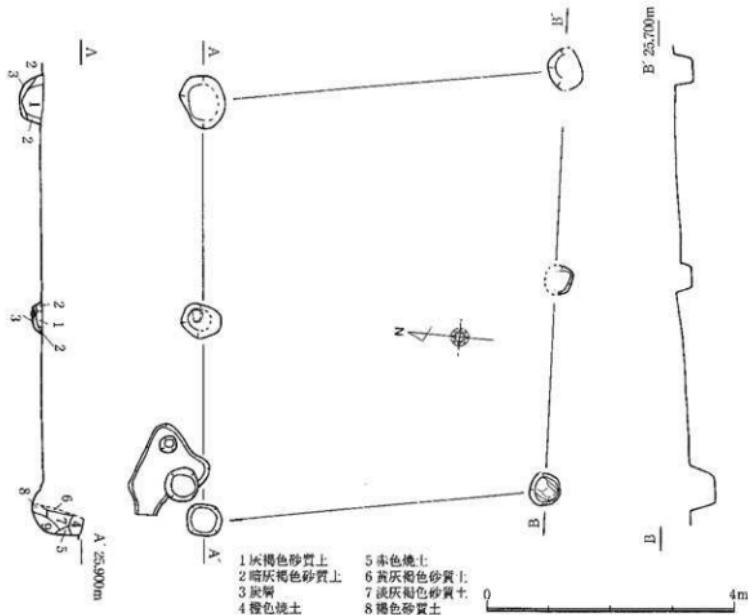
SH-02（図版13）

調査区北西部壁面で調査区の西側に拡がる形で検出した。壁面に残る土層から、1辺3m、深さ0.2mを測る住居址と考えられる。遺物の出土が無い為、時期は不明である。

2. 掘立柱建物

SB-01（第19図、図版13）

調査区南西部で検出した1間（2.8m）×2間（1.8m）の掘立柱建物である。建物の並びはややいびつな、平行四辺形に柱穴を配置する。柱穴はそれぞれ径0.3～0.4mの円形を呈し、深さ0.4mを測る。遺物の出土が無い為、時期は不明である。



第19図 SB-01造構図 (S=1/40)

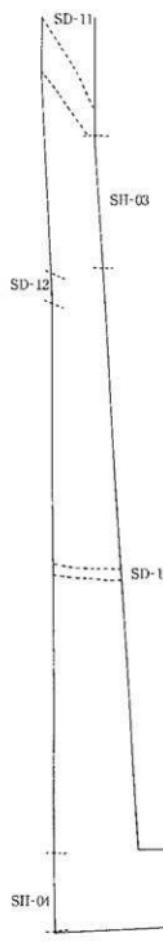
3. 溝

SD-01~08、10 (図版14)

調査区北側で検出した、南北方向に延びる浅い溝群である。幅0.2m~0.6m、深さ0.1m~0.2mを測る。埋土は灰色砂質土の単層である。

SD-09

同じく調査区北側で検出した、東西方向に延びる浅い溝である。幅0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は灰色砂質土の単層である。



第4節 立会調査の遺構と遺物

調査区から南西に850mのところで、幅約3m、総延長60mの立会調査をおこなった。(第20図)

立会調査では、竪穴住居2棟、溝5条、ピット1基を確認した。

1. 竪穴住居

SH-03 (第21図、図版15)

立会い調査北西部東壁で検出した1辺5.4mの竪穴住居である。深さは0.2mを測る。SD-11を切る。遺物の出土は皆無であった。

SH-04

立会い調査南西部で検出した竪穴住居である。遺構の残りが悪く、詳細は不明である。

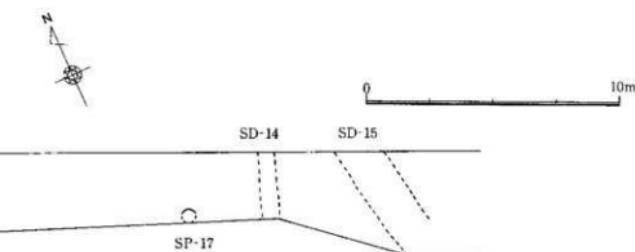
2. 溝

SD-11 (第21図、図版15)

立会い調査北西部の東壁と西壁で検出した幅2.4m、深さ0.4mの溝である。SH-03に切られる。北西方向から南東方向に流れる溝と考えられる。

SD-12 (第21図、図版15)

立会い調査北西部の東壁と西壁で検出した幅1.1m、深さ0.2mの溝である。西方向から東方向に流れる溝と考えられる。



第20図 立会調査区遺構配置 (S=1/200)

SD-13 (第21図、図版16)

立会い調査西部の東壁と西壁で検出した幅0.5m、深さ0.1mの溝である。西方向から東方向に流れる溝と考えられる。

SD-14 (第21図、図版17)

立会い調査南西部の北壁と南壁で検出した幅0.6m、深さ0.4mの溝である。

出土遺物 (第21図、図版18)

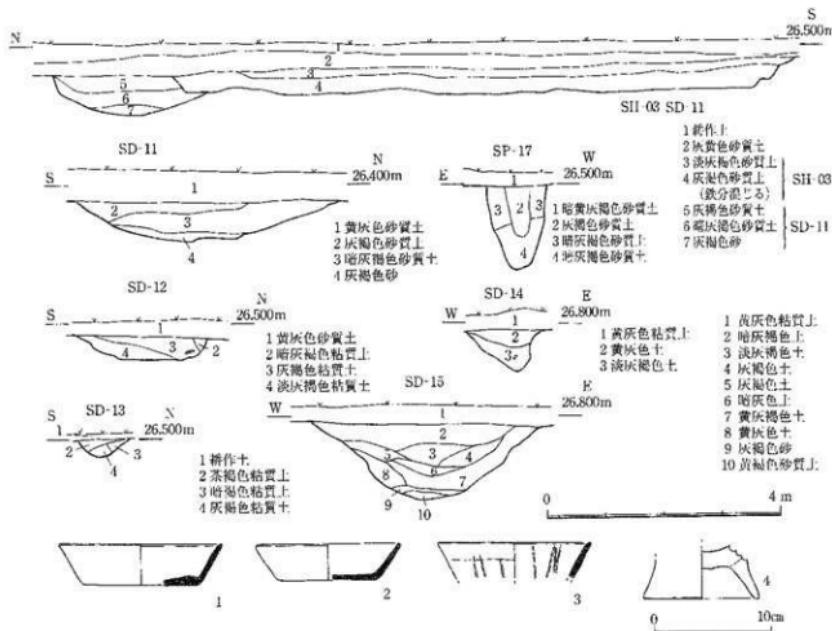
1は須恵器壺身である。口縁部は直線的に外傾する。口縁端部は内傾する平坦面をもち、先細りする。底部にヘラ切り痕をのこす。奈良時代前半と考えられる。

SD-15 (第21図、図版17)

立会い調査南西部の北壁と南壁で検出した幅1.9m、深さ0.6mの溝である。北西方向から南東方向に流れる溝と考えられる。

出土遺物 (第21図、図版18)

2は口縁部が直線的に外形して聞く。生焼けである。3は底部を欠損する。外傾して直線的に立ち上がる。内外面に火だしきふうの痕跡がみられる。奈良時代前半と考えられる。



第21図 立会調査区遺構土層断面図 (S=1/40)、出土遺物実測図 (S=1/4)

3. 柱穴

SP-17 (第21図、図版16)

立会い調査南西部の南壁で検出した径0.56m、深さ0.68mの大型の柱穴である。柱痕を確認した。

出土遺物 (図版18-5・7・8)

5は肥前系磁器である。内外面に灰白色の釉がかかるが、高台内面と底部内面は蛇の目状に露地がみえる。7は灯明皿である。8は搗り鉢である。

出土した遺物は近世のものしかないが、流れ込みの可能性もある。

4. 包含層出土遺物 (図版18-4・6・9)

4は脚台付の壺と考えられる。「ハ」の字状に開く脚で、端部はまるくおさめている。6は用途不明の棒状石器である。幅は0.3cm、断面形状は円形を呈する。9はサヌカイトの剥片である。

第4章 まとめ

田中砂古遺跡で検出した遺構は、竈をもつ竪穴住居1棟（古墳時代中期前期）、時期不明の住居址1棟、掘立柱建物1棟、東西南北に走る浅い小溝群、その他土坑などである。排水路の立会調査では、竪穴住居3棟、溝5条、大型ピット1基を検出した。

竪穴住居（SH-01）は、竈内に高杯が逆さまの状態でほぼ完形で出土した。また、焼尖家屋である可能性が高く、埋土中から多量の炭化木材が出土した。廃絶家屋の存在と、竈の廃絶に伴う行為としての資料価値は高いと考えられる。掘立柱建物（SB-01）は、掘り方の小さいピットから構成される1間×2間の小規模な建物だったと考えられる。

排水路立会調査では奈良時代の須恵器や近世の遺物がわずかに出土している。遺構については、大溝（SD-11・15）や住居址（SH-03・04）と考えられる遺構、大型のピット（SP-17）も確認できた。集落域の広がりを示す手がかりになったと考えられる。

今回の調査は小規模なものであったが、県内では極めて発見例が少ない古墳時代中期の集落を確認した。また排水路立会調査区の調査によって集落城は、時代をおいて8世紀代になって、生活域を南西に移行して生活しているようである。今後の調査によって集落全体の様相が判明すると考えられる。

遺 物 觀 察 表

土器調査表

表面番号	遺物番号	図版番号	取上番号	調査区	遺物名	分類	器種	現存部位	法量(cm)	成形および調整技法		色(外面)	色(内面)	胎七	焼成	備考	
										(外)直	(内)斜						
17	1	18	15		SH-01	土師器	丸底鉢	ほぼ完形	12.0	4.7	—	ナデ/ナデ	褐色(7.5YR6/8)	褐色(7.5YR6/8)	褐色。1~2mmの 砂粒を含む。	良好	
17	2	18			SH-01	土師器	壺	ほぼ完形	14.0	(8.0)	—	磨滅、ミザキ/全体	褐色(7.5YR6/8)	褐色(7.5YR6/8)	褐色。1~2mmの 砂粒を多く含む。	良好	
17	3	18			SH-01	土師器	壺	口縁部	15.6	(5.0)	—	半焼(不明)	黄褐色(7.5YR7/8)	黄褐色(7.5YR7/8)	褐色。1~2mmの 砂粒を多く含む。	軟質	
17	4	18			SH-01	土師器	壺	口縁部	—	(2.3)	—	回転ナデ・底部へ少 少焼(不明)	灰褐色(7.5YR6/1)	灰褐色(7.5YR6/1)	褐色。1~2mmの 砂粒を多く含む。	良好	
17	5	18			SH-01	土師器	壺	把手	—	(4.5)	—	ナデ	黄褐色(7.5YR7/8)	黄褐色(7.5YR7/8)	褐色。1~2mmの砂粒を多く 含む。	良好	
17	6	18	1		SH-01	土師器	丸底鉢	底部	—	(3.2)	(3.2)	半焼(不明)	黄褐色(7.5YR7/8)	黄褐色(7.5YR7/8)	褐色。1~3mmの 砂粒を多く含む。	軟質	
7	7	18			SH-01	土師器	丸底鉢	口縁部	—	(3.1)	—	磨滅(不明)	褐色(7.5YR6/8)	褐色(7.5YR6/8)	褐色。1~2mmの 砂粒を多く含む。	良好	
21	1	18			SD-14	須恵器	壺	ほぼ完形	14.2	3.6	9.6	回転ナデ・底端へ少 少焼(不明)	灰褐色(7.5YR6/1)	灰褐色(7.5YR6/1)	褐色。1~2mmの 砂粒を多く含む。	半緻	
21	2	18			SD-14	須恵器	壺	ほぼ完形	12.4	3.2	8.2	半焼(不明)	黄褐色(7.5YR6/1)	黄褐色(7.5YR6/1)	褐色。1~2mmの 砂粒を多く含む。	軟質	
21	3	18			SD-15	須恵器	壺	口縁部	12.2	(3.1)	—	回転ナデ/回転ナデ	灰褐色(7.5YR6/1)	灰褐色(7.5YR6/1)	褐色。1~2mmの 砂粒を多く含む。	半緻	
21	4	18			SD-17	須恵器	台付壺	底部	—	(4.6)	10.0	10.0	磨滅	灰褐色(7.5YR7/2)	灰褐色(7.5YR7/2)	褐色。1~2mmの 砂粒を多く含む。	軟質
5	5	18			SP-17	土師器	壺	底部	—	(3.1)	4.5	回転ナデ/回転ナデ	明灰色(5G7/1)	明灰色(5G7/1)	褐色。1~2mmの 砂粒を多く含む。	半緻	
7	7	18			SP-17	土師器	灯明皿	底部	—	(1.2)	—	回転ナデ/回転ナデ	灰褐色(12.5YR4/6)	灰褐色(12.5YR4/6)	褐色。1~2mmの 砂粒を多く含む。	緻	
8	8	18			SP-17	土師器	壺	底部	—	(2.3)	—	端り目/回転ナデ	灰褐色(12.5YR4/6)	灰褐色(12.5YR4/6)	褐色。1~2mmの 砂粒を多く含む。	半緻	

石器調査表

表面番号	遺物番号	図版番号	取上番号	調査区	遺物名	分類	石材	法量(cm)	備考		
									長さ	幅	厚み
6	9	18	立会調査	支継井水附 (南北)	支継井水附 (南北)	不明 石	不明 サスガ石	2.2	0.4	0.4	
			立会調査	支継井水附 (南北)	支継井水附 (南北)	サスガ石	2.1	1.7	0.5		

写 真 図 版

図版 9



調査区前近景 南から

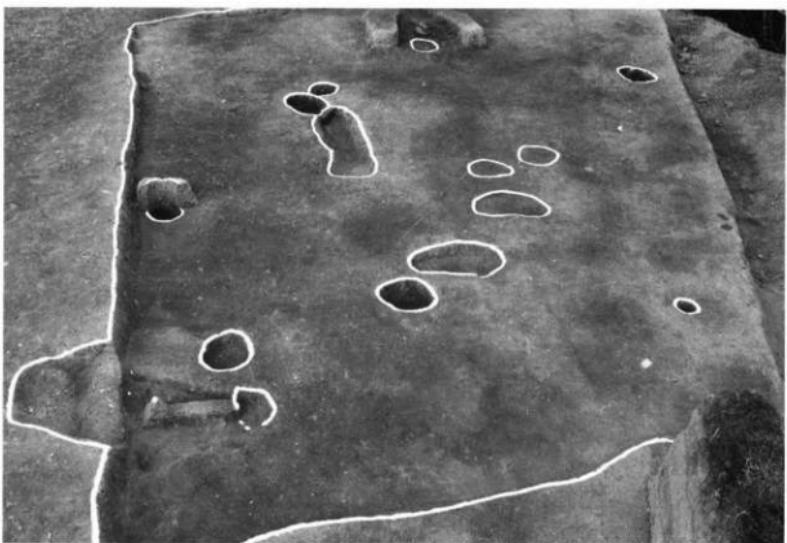


完掘状況 北から

図版10



SH-01 遺物検出状況

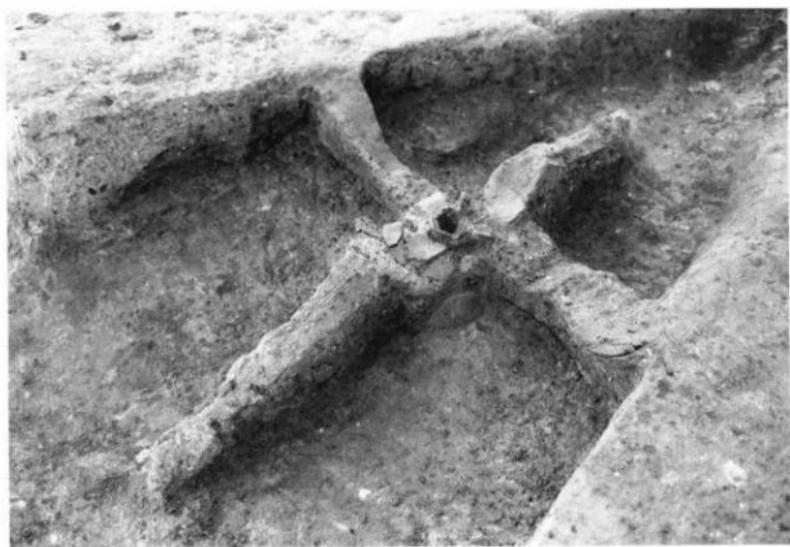


SH-01 完 堀 状 況

図版11



SH-01 竜 検 出 状 況 1



SH-01 竜 検 出 状 況 2

図版12

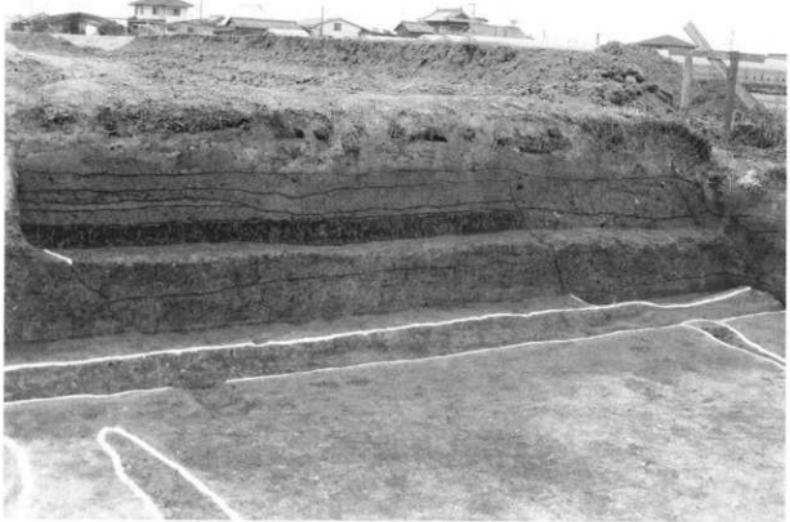


SH-01 電検出状況 3



SH-01 電検出状況 4

図版13

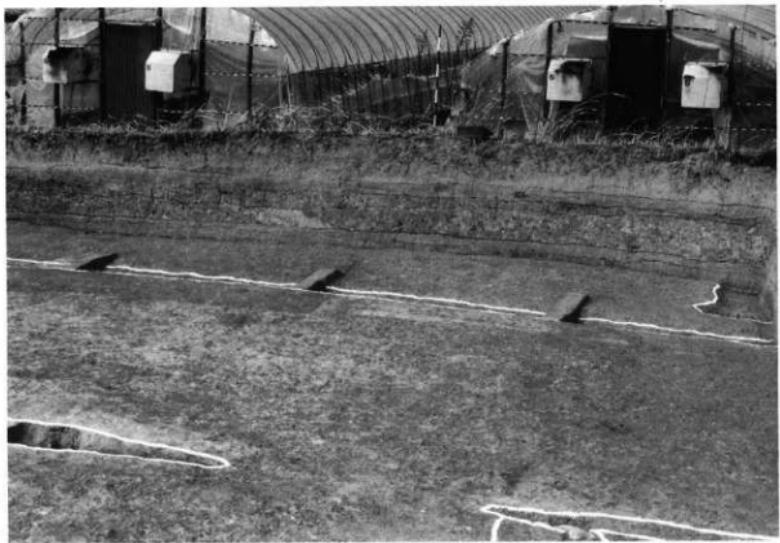


SH-02 検出状況

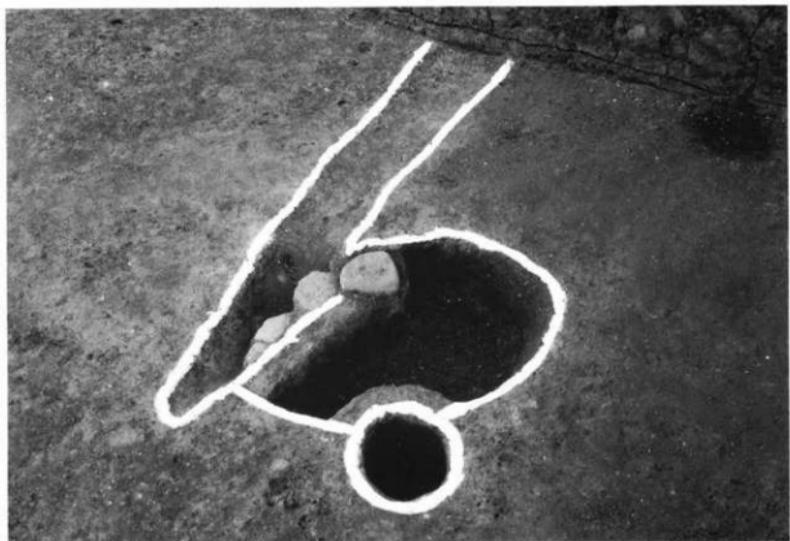


SB-01 東から

図版14



調査区北 SD群完掘状況



SK-08 完 据 状 況

図版15



SH-03・SD-11 土層断面



SD-12 土層断面

図版16

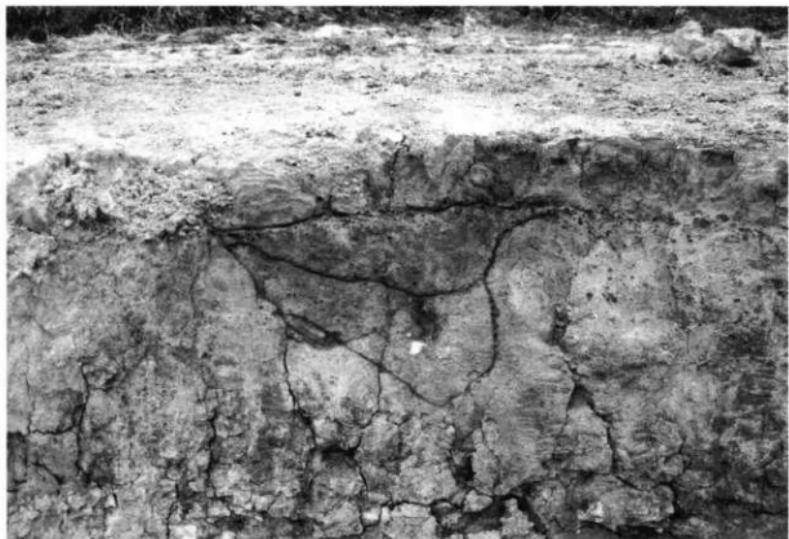


SD-13 土層断面

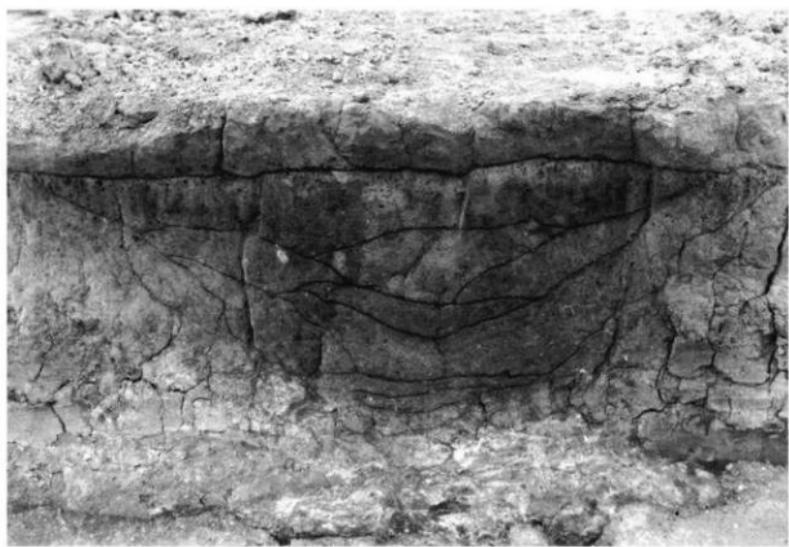


SP-17 土層断面

図版17



SD-14 土層断面

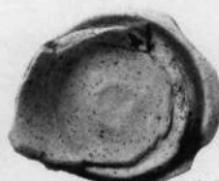
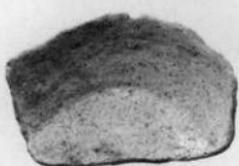


SD-15 土層断面

図版18



SH-01 出土遺物



立会調査出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	たなかさこいせき たなかなんばらいせき						
書名	田中砂古遺跡 田中南原遺跡						
調査名							
巻次	2004.3						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編集者名	持田 透						
編集機関	株式会社イビソク						
所在地	岐阜県大垣市築捨町3丁目102番地 TEL0584-89-5507						
発行機関	三木町教育委員会						
発行年月日	2004.3.31						
総頁数	日次	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数
72	3	29	4	18	44	20	0
所収遺跡名	所 在 地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
田中南原遺跡	香川県木田郡三木町 大字田中字南原	37341 00188	34度 14分 19秒	134度 07分 10秒	1994.12.26 ～ 1995.1.15	101	圃場整備
田中砂古遺跡	香川県木田郡三木町 大字田中字砂古	37341 00193	34度 15分 47秒	34度 06分 56秒	1997.1.13 ～ 1997.2.25	191	圃場整備
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
田中南原遺跡	集落遺跡	弥生時代中期後半 弥生時代後期 古墳時代前期	竪穴住居		弥生土器 上師器		
田中砂古遺跡	集落遺跡	古墳時代中期 古墳時代後期	掘立柱建物 竪穴住居		上師器 須恵器		

田 中 南 原 遺 跡
田 中 砂 古 遺 跡

2004年3月

発 行 三木町教育委員会
〒761-0692
香川県木田郡三木町大字氷上310
TEL:087-891-3314

印 刷 株)イビソク
岐阜県大垣市兼治町3丁目102番地
TEL:0584-89-5507